觀大亞細亞

輯十第

XI
2

財團法人東洋文庫
11946
昭和十三年九月廿三日

第十輯 (自昭和八年七月 (冊109回)
至 〃 九年 (冊119回)

〔冊110回刊行年不明〕

昭和八年七月—〃九年

109回 義縣・北票
110回 千山奇勝
111回 清津港點描
112回 京図線・國境驛・雄基・羅津
113回 琿春点描
114回 京図線点描
115回 大黒河点描
116回 瑷琿と附近の点描
117回 北安鎮と其の附近
118回 承徳といふ處
119回 承徳の普寧寺

東洋文庫

踏破撮影略圖

亞細亞大觀附錄

版權所有　不許複製

大連市山縣通一九三
編輯人　青山春路
同
發行人　島崎役治
同
發行所　亞細亞寫眞大觀社

義縣北票（奉天省）（熱河省）

第百九回
十輯一回

嘉福寺の白塔……一
白塔を望みて……二
大佛寺の門前……三
奉國寺の境內……四
大佛寺の本尊……五
土民の家……六
炭礦町北票……七
中央大街にて……八
炭礦の設備に見る……九
チップラーもありて……十

義縣の二名物

大連市山縣通一九三
亞細亞寫眞大觀社
電話六二三五
振替大連七一八

發行　每月拾五日
昭和八年七月發行

義縣の二名物

(1) 大佛寺

義縣第一の大刹を奉國寺と名けるが、其の中に七佛を藏することにより又の名を七佛寺と云ひ、又其の像の巨大なることを以て大佛寺とも言はれて來た。その通稱大佛寺が今日では殆んど本名となつてしまつた。

遼東志の中に「奉國寺、在鐘樓東、一名七佛寺、佛宇高七丈、中有佛像七尊、高與堂稱、中建石碑」とあるから、この寺の由緒と共に、その佛像は恐らく遼代からあつたものかとも想像されるが、塑造の手法は極めて新らしく、何となく佛像だけは近代の製作らしくも思はれる。

寺は南面して立ち、七大佛像はその最奥の大雄寶殿の中に安置せられてゐる。中央に釋伽像あり、其の左右に各三佛宛、計七體の佛像の偉觀は、義縣の名物たる名に恥ちない。然も手法の新さはあれ、佛顏均しく慈相溢れ、仰ぐからに崇敬の念湧然として起る。

寺の境内に樹木多く、幽遂の趣あるも又棄て難い風韻だ。寺門の小さい乍らも落着いた構築や、佛堂の甍が樹木の間に蔭顯するあたりに言ひ難き古雅を見る。

この寺の今一つの寶物は、その堂中の金碑の存在である。金は滿洲に緣故が深かつたが、滿洲に殘された金碑は割合に少い。この寺内のものは、その完全な点に於て、その當時の狀況を知る上に於て、極めて珍重すべきものであり、義縣の名物たるを失はない。

碑文を讀めば義縣の町が其の當時頗る繁榮し、遙に今日の義縣以上であつたことも想見せられ、且佛寺が「碁布星羅、比屋相望」とあるに見れば、佛教の盛んであつたこと、その佛寺が夫々皆宏壯華麗であつたことも肯かれて、今昔の感が深い。遼代に建立せられ、金に及んで更に其の繁昌を增した義縣は、當時佛教の一つの中心として盛へたものらしくこの小碑の存在は、益々奉國寺（大佛寺）の價値を裏付け、一面義縣の地位を何よりも雄辯に證明するものである。

この金碑の外に元代の碑と清代の碑と二碑相並び、明代の碑もその隣にある。文を按ずればこの大佛寺の由來は更に肯かれるが、大體の創造年代が、碑文通り遼の開泰九年なりとすれば、この寺は既に九百十數年を經たことになる。

義縣それ自身の古さは、先づ第一にこの大佛寺の存在によつて證明せられる。

(2) 嘉福寺の白塔

義縣第二の名物は、白塔である。義縣到着第一に望見するのは、城の西南隅にどつしりと聳ひてゐる白塔の姿である。同樣の塔は錦州にもあるから、義縣の白塔をこの附近の代表者には數へられないが、約九百年の歲月を經ても、外觀さした損傷を見せないこの塔を義縣の代表的名物に數ふることに異存はあり得まい。

盛京通志にこの塔の記事がある。「嘉福寺、在城內西南隅、大殿三楹、大門一楹、寺前有塔一座」言ひ忘れたが白塔は嘉福寺の境內にあるので、その嘉福寺も亦塔と同樣の古き歷史を有する古刹である。この寺は目下學校として使用されてゐる。寺內には釋伽三尊の塑像や十六羅漢等を安置し、一通り佛寺の外觀內容を有するが、最も代表的なものはこの白塔である。

大遼時代建立の塔は、正確な高さは不明だけれども大約百七八十尺、十餘層を築き、八面の佛塔である。その長き星霜にも拘らず殆んど損傷してゐない点は珍らしいことで、塔下の重修碑を讀めば、前清代に大陵河の水が溢れて「一望皆成巨浸」となつたこともあるらしいが、今は一高台の上にあり、此所にも滄桑の變の感がある。

高台の上に登れば四邊の眺望絕佳、當時も固よりこの台上の眺望はあつた筈だから、この塔の名は遠近に響いてゐたに違いないと思ふ。

塔は滿洲所在の塔の特長を示して中實で登ることは出きないが、仰いで望めば塔上の周圍には圓鏡を嵌め、一異樣式を示してゐる。その圓鏡時に落下するさうだが、その鏡の所有者が明となり、これが考證さるれば、塔の創建年號も或は明にならうが、今日では單に遼代のものと云ふに滿足する外はない。

塔の下部には小佛像を安座する基壇か設けてある。その佛像に就ても學者間には色々の考證があるやうだが、素人には興味の少いことだから省略する。

ともあれ白塔の雅姿端然たることが、義縣の第一印象として、現在汚なく見る影もなく埃にまみれてゐるこの町を、古都らしい何となくなつかしいものに感じさせる事だけは事實だ。

嘉福寺の白塔
（奉天省義縣）

義縣は先づ白塔の町である。町の西南隅にごつしりと聳に立つた白塔が、この町の代表的名物である。

塔は嘉福寺の境内に在り、遼代の建立と傳へられ、千年の風雨に、殆んご原形を保つて今日に至つた。寺は目下學校に使用せられ、塔下に伊唖の聲を聞く。

（印畫の複製を禁ず）

白塔を望みて
(奉天省義縣)

白塔に代表さるゝ義縣は、遠く遼の時代に榮にた町である。町の家々が、このあたりのご の田舎町とも變りなく、しよんぼりと蹙つてはゐるものゝ、街路の一本の樹、一塊の石にも歴史らしい移香を殘してゐるのは、矢張り塔をシンボルとする古さの中に生きる町だからであらうか。

(印畵の複製を禁ず)

大佛寺門前
（奉天省義縣）

白塔と共に義縣の代表者大佛寺は、嘉福寺と相對してその東北隅に在り、本名を奉國寺と言ふ。大佛寺の名はその大雄殿に安置さる七體の大佛像の存在からであり、從て又の名を更に七佛寺とも呼ばれる。清代重修の跡が目立つてはゐるが、何となくぎごちない寺門の構造に、歷史の古さらしいものを感ずる。

（印畫の複製を禁ず）

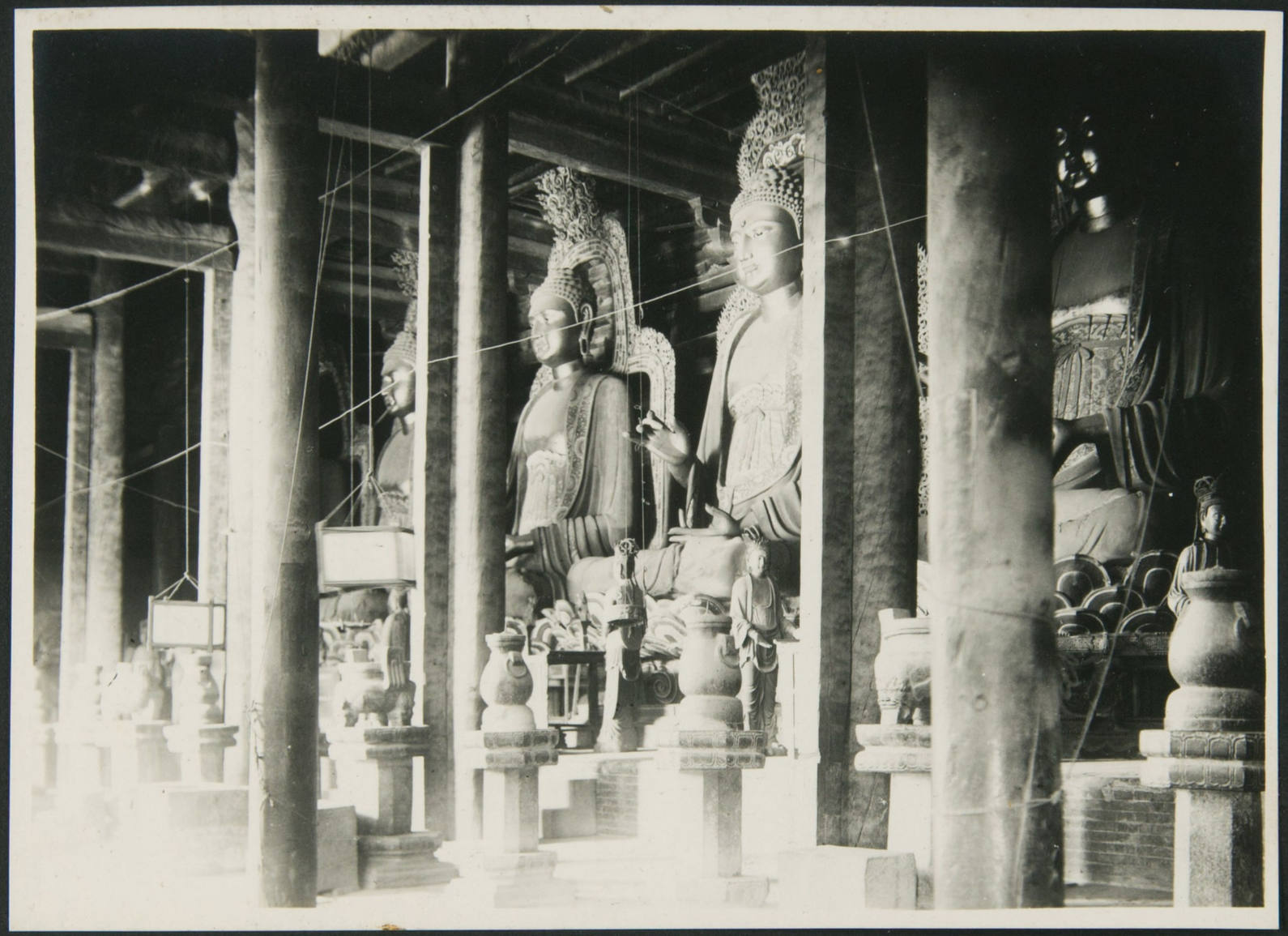
奉國寺境内

（奉天省義縣）

寺内は廣莊で樹木多く、風韻掬すべきものがある。この境内の最奥に大雄寶殿があり、その中に有名な大佛七體を安置する。

この寺も遼の開泰年間の創建であり、古來蒙古王との因縁も淺からず、大雄殿の扁額の字も、氣のせいか素晴しく立派に見える。

（印畫の複製を禁ず）



大佛寺の本尊

（奉天省義縣）

大雄殿に奉安するこの寺の本尊は、釋伽牟尼を中心とする偉大な七體の佛像である。高さは各三丈六尺、製作年代は明かでないけれども、塑造の手法から推して、恐らく近代のものであらうが、七體の大佛何れも慈相溢れ、蓋し一偉觀である。

（印畫の複製を禁ず）

（回一輯十）　（觀大亞細亞）

土民の家

（奉天省義縣）

義縣の古寺古塔が古さを誇るやうに、土民の生活も四千年の昔が其まゝである。家とは名ばかりの土屋、雨季の雨漏りを恐れて、壁のやうに塗り固めた屋根の上で、塗っただけでは不安心だとあつて、女子供には屋根踏みの日課さへもある。

（印畫の複製を禁ず）

北票炭礦（熱河省）

北票炭礦の名は、久しい間撫順炭礦の有力な敵として數へられて來た。埋藏量や設備は問題ではないが、銀安と國貨提唱とを武器として、奉天の撫順炭の地盤を侵蝕してゐたのだ。

町の眞中に、平和舘と云ふ日章旗の旅舘を發見するのも、やつと事變後の滿洲風景だ。

（印畫の複製を禁ず）

中央大街にて
（熱河省北票）

今日の北票は、錦州から分岐する鐵道支線の終点とし、熱河に對する滿洲國の軍事、政治兩工作の基点である。

北票は固より單に石炭の町としてばかりでなく、物資の輸送幹線の基点としての役目を勸めては來たが、更に今はその重要性を倍加し、中央大街は、この繁榮を續けてゐる。

（印書の複製を禁ず）

炭礦の設備に見る
（熱河省北票）

埋藏量一億萬トン、年産額五十萬トンと號する北票炭礦は、流石に東北軍閥の官僚資本を背景とするだけに、相當な規模を誇つてゐる。

平地の聳立する捲揚機の櫓、林立する大小の煙突、事變前撫順炭が脅かされた敵手の姿が、今は白日の下に靜り返つてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

チップラーもありて
（熱河省北票）

歴史が占いだけに、そして東北軍閥が多年力を入れてをつただけに、北票炭礦は新しい設備も相當豐富だ。

然し觀る人に與ふるこの炭礦の印象は、統一されない設備のちぐはぐな存在だ。設備と人とが離れ切つてゐる感じだけだ。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀

千山奇勝

第百十回
十輯二回

千山峯の天仙……一
峯の波……二
千佛崖絶勝……三
靈動の石刻……四
龍泉寺の全景……五
綠の千山……六
雪の千山……七
石刻の佛像……八
道佛の混淆……九
道士……十

千山奇勝　八木靜山

大連市山縣通一九三

發行所　亞細亞寫眞大觀社

電話六二三五番
振替大連七一八番

（每月一回十五日發行）

編輯人　青山春路
發行人　島崎役治

千山奇勝

八木靜山

(1)

天下山多し、而も名山少し、天下水饒かなり、而も勝水乏し、吾れ滿洲の地を行て、山の愛す可きものは唯だ千山及び鳳凰山の二者を見るのみ、而して水の佳なるは松花、鴨綠の二江に留れども、水は山に恃て其美を增し山は又流水の妙を得て其奇を加ふ、故に二者相伴はざれば、以て名山、勝水とは稱す可からず、古人は山高きに非れども仙あれば即ち名あり、水は深きに非れども、龍あれば即ち靈なりと曰へり、而も今日の世は仙と龍を得可からず、又地域の餘り狹小に失して、山は蟻塿の如く、水は小溝に類するものは俱に賞觀に適す可からず、故に山嶽は飽まで高きを好しと爲し、流水は飽まで深く且つ廣きをよしと爲す、彼の富岳の大觀は其姿容の美に加ふるに高大の度を以てするが爲め古來王座に居り、又琵琶湖の盛者は、其廣きが上に深く且つ島嶼あるを以て日本第一と稱せらる、而して山嶽美の要素は他に樹木繁茂し、加ふるに奇岩、怪石に富む點に在り、此數者共に兼備せざれば、以て名山、勝水とは稱す可からず、滿洲の地、恨むらくは斯種の例殆んどなし、而も千山、鳳凰山は較や右に近し、故に先づ千山を說て、他日別に鳳凰山に逮ぶ可し。

(2)

千山は之を二區に別つ、其南方泰和宮、香岩寺、大安寺等の地域は之を表(オモテ)或は外(ソト)千山と呼び、北方無量觀、祖越、龍泉の二寺より五佛頂方面は之を裏(ウラ)若くは內(ウチ)千山と稱するを可とす可し、古く明淸時代に於ては其東方無量觀方面より入るを順路と爲せり、故に道路平坦、山に入るも亦た緩傾斜の爲め、步行至て安易なりし、然るに現今は鐵道の便を假る關係上、舊時の背面なる大孤山より、普庵觀を經て、直ちに五佛頂の高きに登るか、然らざれば湯崗子より、石橋子に出で、橫に西洋宮嶺を越へて龍泉寺に入る順序を執れり、之れ古今道路の變化上已むを得ざる點なりと雖も予は此新道路に就て一の注文あり、开は斯の間に廣道を作り、馬車、人車の往來を容易ならしめ、且つ路傍の兩側には松樹を植へ、以て風致を添ゆると與に、千山との接觸を美化し便利化せしむる點に在り、之れ本線唯一の奇山たり、名山たる地域を天下に紹介し、兼て千客萬來の方策上土地繁榮の手段として尤も必須、急務の一たる可ければなり、彼の湯崗子、鞍山等の地方人士諸君は深く此點に注意あれ。

次に千山の大觀は百千の群峯高く天空を摩ること宛も劍戟を並ぶるが如く、又奇岩、怪石の縱橫山形を構成するは彼の百獸の其間に躍るに似たり、而して屈曲龍の如き老松が萬籟を含みて嗚吟する時は眞龍の天に昇るかと疑はれ、殊に白雲の峯頭に去來して山形の雨を帶び來る狀は山神の靈を示すにあらずやと推せらる、若し夫れ春花、秋紅の候、樹陰深き所に讀經の聲を聽き、梵鐘の霞に隱れ、雨に響く時は、山容の美一段の妙を加ふると俱に韻致更に其深きを覺へしむ、世の游子が一度此境に入りて世を忘れ、俗を脫するの思ひあるは洵に故ありと曰ふ可し、以下各寺院に就て少しく其要を申述ぶ可し。

(3)

千山の寺觀中、其尤も遼陽に近くして且つ古かる可しと思はるるは祖越寺なり、而して今日の無量觀は其一部景勝の地を買收したる舊東佛堂に相違なく、又今の老子廟は舊來鶴亭の箇處なるに似たり、當寺中道光四年の碑を讀むに「祖越之景致尤佳」と記せること確に無量觀邊の位置を指すに似たり。

又今の祖越寺は無量觀の西方に隣りて一個の本堂を殘すに過ぎず、且つ景色美も前者に比すれは遙かに劣れり。

次に龍泉寺は又祖越寺の西方に在りて、當寺は道路の北方に山門あり、門を過れば本堂あり、盛京通志に據るに當山は明の穆宗、隆慶五年の創建に成り、爾後數回の重修を經たるが爲め、外觀頗る美麗なり、碑文に千山に五大寺有り、龍泉は其一なりとあれば、古く五大寺中の一に加はることを知る可し、而して五佛頂は當寺の西北方上に在り、其北に靑雲觀あり、之れより大孤山に下る。

外千山の中にて最も東方の通路に近き寺を中會寺と爲す、明人龔用卿の當寺に遊ぶ詩有り、曰く。

遠寺山僧少　叢林草徑深　懸崖磐石磴
古殿度雲嶺　枝密廻溪合　嚴幽向日陰
欲將金印解　瀟灑定祿心

此詩四十字以て中會寺の全貌を盡すに足れり、又寺後に淨瓶峯あり、此邊は千山々嶽中の最高峯を爲し、群峯競ひ聚りて嶮絕人を驚かすの觀あり、恐らく千山中奇勝の白眉なる可し。

次に大安寺は中會寺の南方に在り、又其間に羅漢洞を存す、中に羅漢八躰有り、寺は此洞を穿つ寶臺山を背後にして、前面に金剛、透明の二高峯を望見す、風景佳絕なり、堂宇には大雄寶殿あり、其左右に禪堂あり、又賓堂あり、以て山中の美觀を加ふるに似たり。

大安寺の西々北に香巖寺あり、其最高峯を仙人臺と稱す、當寺は四方の高牆中に在て南面す、其內に前殿あり、大雄寶殿あり、左右の禪堂あり、又客堂あり、現在の分は凡て光緒六年の重修なるが爲め甚だ美觀なり、又寺の東南近くに二石塔あり、古色蒼然として風韻に富めり、此塔は元の高僧雪庵の舍利塔なるが爲め、當山最古の遺品なる可し、又仙人臺は即ち此塔の先なる胸突き坂に類する急坂上に在り、千山中の最高峯として一大偉觀を示す、蓋し當山は到る處に樹木多しと雖も、就中香巖寺近傍は松樹欝々乎として、四境寂然、一鳥鳴て山更に幽なりの感を生ず。明人程啓充の詩あり、曰く。

危途長側足　高處更回頭　行路難如此
何時臥故丘

千山峯の天仙

千山は長白山脈に併行し、東北より西南に延亘せる山列であつて山骨は花崗岩より成り、瘦骨稜々風化雨蝕の妙を極め、山峯は鋸齒狀を成し、その遠望は恰かも千山の拉列するやうで、千山の名はこれに因んだものだ。山容は千姿萬態風致に富み、時に天仙の蠢立するが如く、或は鳳凰の舞ふが如き怪岩奇峯の自然美は鈍筆のよく形容し得るところでない。

（印畫の複製を禁ず）

（1）の回二輯十）　（觀大亞細亞）

峯の波

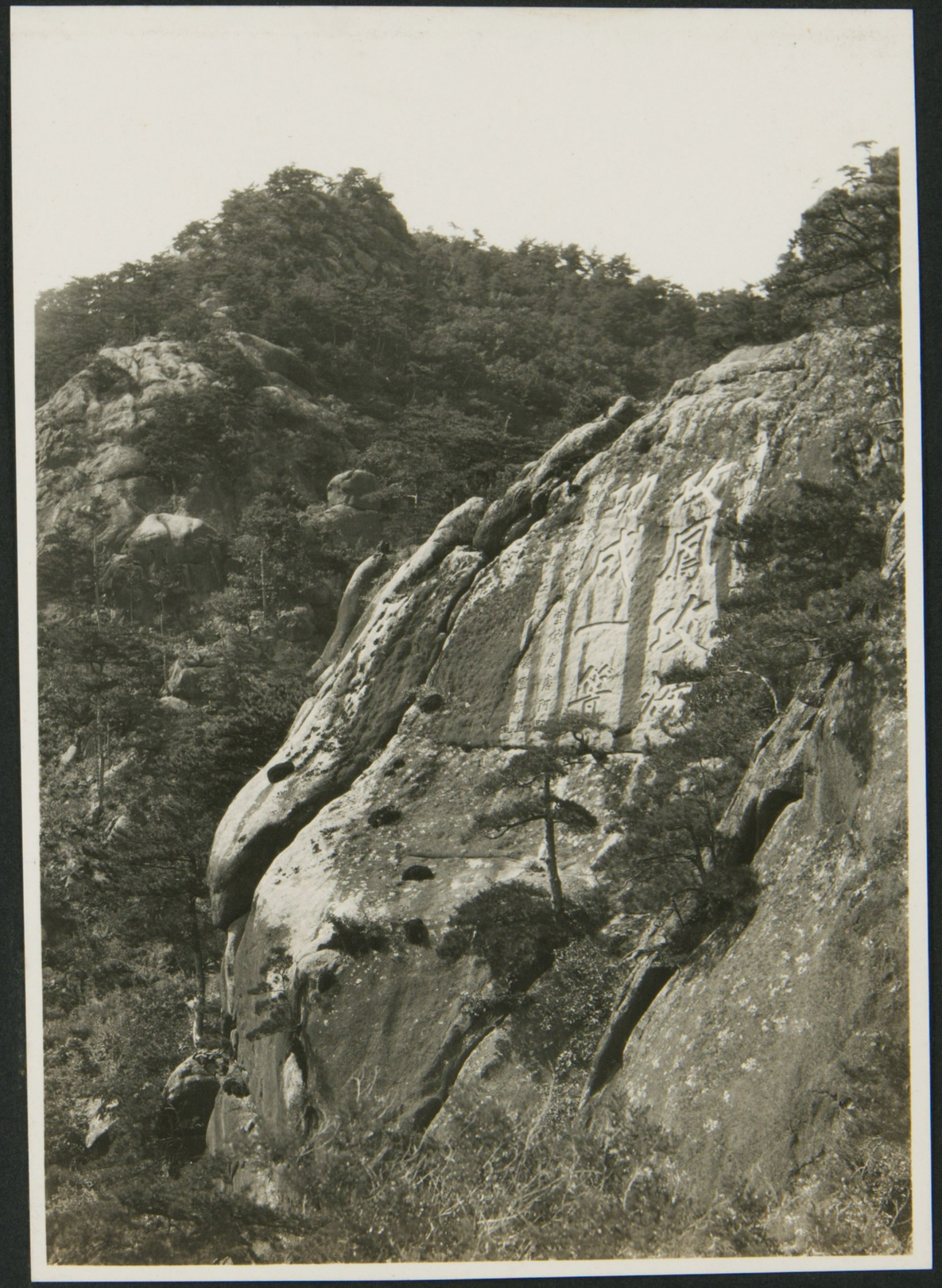
千山は數多の諸峯が連なり、見渡す限り山又山、相重つて峯の波を成す。其雄大な全景山體の大膽な構成、懸垂の絕壁、怪奇な峽谷、純潔の瀑布、急湍深淵に現はれる光線と色彩の變化は、何といつても靈山としての名を恥かしめぬ。

（印畫の複製を禁ず）

千佛崖の絶景

千山が聖靈にして崇高美麗な所以のものは、山容の美しさであるが、岩と木が理想的に配され、老松は奇岩に倚り或は奇峯に懸つて美を添へる風情は、全く神意によつてなされた觀がある。垂直に嶮立した削峯を見上ぐると、將にグラ〳〵と崩れて頭上に落ちかゝらんとし、見上ぐる人の足もとは無情にもよろめきそうだ。

（印畫の複製を禁ず）



靈動の石刻

花崗岩の斷崖絶壁は、著しい巨晶の岩理を露はし、永い間、自然の營力たる風雨の削剝作用を受け、創磨された肌は碧の如くに滑らかで、人工が加へられたやうだ。そこには「攻鳳攻海、功成一簣」の四字が彫まれてゐる。自然崇拜の宗教的靈動は人の魂を動かし、遂にかゝる工作を強いるに至つたのであるが、その勞費は大きなものだ。

（印畫の複製を禁ず）

（4の回二輯十）　（擴大亞細亞）

龍泉寺の全景

奇峯峭壁、飛瀑奔流、雲烟縹緲、綠樹重蔭、禽鳥和鳴の仙境に龍泉寺がある。明の隆慶五年の建立で、後殿には雄大な塑像の彌陀三尊が安置されてゐる。千山に於ける多くの古刹中堂宇の宏壯善美は有名なものだ。然かも處女林に包まれた清澄の境地。聖尊を祀る靈地としたのは當然のことだ。

（印畫の複製を禁ず）

千山の緑

千山の美を彩るものは、何といつても山水の美に配するに樹木と草本とである。密生した老松の外に樅、樽、白楊、槲、楓などがあり、春は岩壁に躑躅や山木蓮などの花も美しく、ライラック姫百合其他の珍草も尠なくない。秋霜一度到るや紅葉は山を染め満山錦繡と化し、山の美の凡てを背負つて立つ。圖は五佛頂五佛寺。

（印畫の複製を禁ず）

（6の回二輯十）　（關大亞細亞）

千山の雪

千山の四季は萬朶の花に醉ふ春、掬すべき綠蔭の銷夏、全山錦繡を以て彩り花よりも美しい紅葉の秋や冬の雪景は全く塵外の仙境だ殊に雪の千山は亦格別で老松の梢は綿の如く に白く、積雪は皚々として峯巒をも埋めるが、強烈な北風に襲はれ積雪を飛ばし岩骨が現はす時は恰かも山を裸體とした上、肉まで削り取られた感じがする。

（印畫の複製を禁ず）

石刻の佛像

仙人台は千山の第一高峯であつて、龍泉寺を距る約五里の地にある。道路崎嶇、孤峯峭立、木梯を架して上る、台上の岩壁には石佛十體を彫み宗教的價値を高めてゐるが、昔は十二體であつたと傳へてゐる。圖はその一體であつて、その溢れそうな慈相から見ると觀音か妙吉祥天であらう。

（印畫の複製を禁ず）

淆混の佛道

道教は老子を祖となし福、錄、壽を基とした教であつたが、後年に至り偶像を設けて冠婚葬祭をも行ひ、その寺院を觀、宮、廟と稱ひ、廟宇の有名なものは何といつても千山のそれであつた。玆にも彌陀や五百羅漢を祀るかと思へば玉皇や天后を併祀し、佛教と道教とは全く混淆されてゐる。圖は岩窟を利用して祀られた等身大の五百羅漢。

（印畫の複製を禁ず）

道士

佛教に僧侶がある如く道教には道士がある。特種な道帽と黒襟のついた紺色袖廣の道衣を着、形式的の讀經はしてゐるもの、多くは醉生夢死の生活をなし、世道人心を教化するが如きは望むべくもない。然かし俗里を離れた仙境に住む彼等の溫容には、どことなく浮世放れがしたところがある。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀附錄

亞鮮交通略圖

版權所有 不許複製

大連市山縣通一九三
編輯人 青山春路
同
發行人 島崎役治
同
發行所 亞細亞寫眞大觀社

清津港点描

清津港……一
鰯油……二
魚油……三
待望の列車……四
日本海の湖水化……五
初荷……六
清・雄間の交通……七
朱乙の秋色……八
朱乙の石壘……九
木の出る山……十

清津港の点描

今枝折夫

大連市山縣通一九三
亞細亞寫眞大觀社
電話六二三五
振替大連七一八
第百十一回
十輯四回

清津港点描

今枝折夫

◇

滿洲國の發展とともに、急激な飛躍をなしつゝあるものに北鮮清津がある。いはゆる吉會鐵道の終端港として、雄基、羅津と覇を爭つた清津ではあるが、現在朝鮮東海岸最大の國際的商港として、又北鮮に於ける中樞的貿易港として、廣汎なる商勢圏を保ち、海陸共に各地との交通運輸の便頗る良く、羅津完成後と雖も清津の位置は一層確乎たるものがあるであらう。

清津港は元山より二百五浬、浦鹽より百二十八浬に介在し、市街は平地に乏しきため年々發展に應じ、海面を埋築し、或は溪谷を塡充し、山腹を開鑿して建設したもので、既に現在に於ては發展の餘地なく、滿鮮交通機關の完備せる今日、清津築港工事の竣工と相俟つて港灣機能の發揮により貿易は益々殷盛を來すべく、市街は勢ひ停車場を中心として輸城平野に向つて進展するの外なく、兼て之に順應すべく輸城川河床の改修附替は、昭和六年工費百九十八万圓を以て三ヶ年繼續事業として起工され、近くこれが完成の曉は、新設川の築堤を境界とした四百万坪の新市街地を抱擁する大都市が豫想されてゐる。

◇

然しこの清津も、日露戰役當時に於ては戸數僅かに百餘戸に過ぎず、全役わが北韓軍の活動によつて物資の陸揚地となつて以來、にはかに日鮮人の移住者を增し、明治四十一年遂に萬國通商港として開港、爾來年を逐ふて堅實なる基礎のもとに着々咸北第一の大都會として今日の偉容を整へ、昭和八年八月現在の人口は、三六、三六八人を容してゐる。

◇

清津港灣は、高秣半島の突角から、輸城河口右岸に一線を引いた線内を港域としてゐる水尋の深いことは北鮮屈指で、日露役の際わが船艦四十餘隻が一時に港内に碇泊したのも判る。千滿の差僅に二尺、高秣半島は自然に東風を防ぎ、市の西部を圍繞せる天馬山で北風を避け、天然の良港となつてゐる。

港灣の設備は、明治四十年以來漸次充實しつゝあるが、現在總工費六十三万一千圓を以て、大正十一年度から繼續されてゐる大清津築港は、既に三千噸級四隻を同時に繫留し得る岸壁が竣工し、連日内地航路の巨船が横づけとなり、その性能を發揮してゐるが、五千噸級三隻、三千噸級四隻を繫留し得る全築港計畫の完成も間近に迫り、八万平方米の埋立によつて大体百三十万噸の荷役能力を得べく今や東滿洲の玄關としての活躍が期待されてゐる。

◇

北鮮寶庫の開拓、豊富な滿蒙物資の輸送、國境の警備、軍事上等幾多の重要な政策から昭和二年度以降六ヶ年の繼續事業として圖們線の敷設が起工され、本年八月全通、更に十月一日を以て清津以北の線を併せて滿鐵の經營となり、北鮮鐵道管理局が清津に設置さるゝに至つた。

一方、滿洲の大動脈である京圖線も全通、本營業を開始すると共に、十月十五日を以て新京、清津を結ぶ一大國際鐵道の直通實現を見た。いはゆる吉海線の完成、日本海と北鮮を通じ、日滿間のショーテスト・ルートとなり軍事上、經濟上絶對に必要とされた待望の鐵道は、間島條約後二十五年、初めて完成されたことになる。更に天圖鐵道の廣軌改築も大半終り、拉濱線、圖寧線の竣工と共に、北鮮三港、清津、羅津、雄基は、これらの新線によつて吸收される數千万噸の北滿貨物を呑吐すべく滿々たる活氣を現はしてゐる。尙圖們江岸、埋藏量十億噸と稱される石炭、十億七千万石といはれる大森林から伐採される木材、その他松花江、圖們江、間島の石炭、金鐵等は、吉海線背後の經濟的大勢力として、清津府の飛躍は、擧げて今後にかかつてゐるといふも過言ではなからう。

◇

敦賀から清津へ三十七時間（一時間一五ノットの滿洲丸）直ちに連絡船をうけて清津から新京へ、汽車によること二十三時間、この日滿間交通の最短線は事實上日本海を湖水化した。然しこの機能の完全な發揮は、海陸とも今後のスピード・アップに俟つべきであることはいふまでもないが、現在に於てもこの新コースの利用客は漸次激增の經過をとりつゝある。

◇

清津は、本道に於ける水産物の集散地であると共に、附近一帯は有數な漁場で、回遊魚族頗る多く、隨つて魚民の來住するもの亦多く、漁獲物も逐年增加するので、漁港急設の要あるを認め、大正四年以來漁船溜を築造してゐたが、八年七月から工費百万圓を以つて新輸城川尻に着工した大漁港は、明年度中に完成、茲に日本海漁業の本據となると共に附近一帯は一大工場地とならむとしつゝある。

附近沿海に於ける鰯漁業は就中見るべきものがあり、現在に於ては殆んど魚肥若くは搾油原料として處理、移輸出されるもの年額魚油八一〇、一一一圓、魚肥九六五、〇三八圓の巨額に上り、清津のため氣を吐いてゐるが尙滿洲方面との直通運輸の開始に伴ひ、一部食料化をも見るに至るであらう。

清津港

清津港東南部の灣口を扼する高秣山に登れば、清津の全貌は一眸のもと、遠く輪城平野を隔て、咸北の連峰を望み、眺望頗る絶佳。こぢんまりと整つた内地風の港街、近く滿洲寶庫への血脈を流動せんとする物資に備ふべく、岸壁と上屋の完成を急いでゐる。対地へ又沿岸への連絡船も美しい姿を見せ、鰯舟が蝟集するなど、この一葉の寫眞にすら今日の清津がもつ活氣は、まざまざと窺ふことが出來る。

（印畫の複製を禁ず）

（1 の回四輯十）觀大亞細亞

鰯

秋の清津は、鰯の街だ。沿岸航路の波止場が、鰯の山で足の踏場もない。海水は、魚血と脂で粘液のやうな光を反射させてゐる。この愛すべき銀鱗は、市民の味覚からはおよそ縁遠きもの、三十万圓の鰯は、ショベルで四斗樽へ一杯二圓、更に七杯が牛車に積まれて夜半も街裡を郊外へ運ばれ、あらゆる郊外が鰯の搾粕の作製に利用されてゐる。——秋の清津では、旅客は驛に着くと、すぐ鰯の匂を知るであらう。

（印畫の複製を禁ず）

油　魚

北鮮方面の沿海を埋める鰯は、今日では全く魚肥又は搾油原料として處理され、その製品は、清津港だけについて見るも、移輸出されるもの、魚油年額八十一万圓、魚肥九十六万五千圓に上り、清津は漁港としての價値をも多分に約束されてゐる。石鹸の主要原料として内地に積出される魚油の罐は、税關構内にあつて、黄色の新しい荷札を、折柄の秋陽に映じさせ、海の幸を沁々と、見る人に感じさせてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

待望の列車

待望の昭和八年十月十五日、この記念すべき日の清津は、朝からの秋雨に濡れてゐる。驛頭は、清津全市民を擧げての歡迎、極まれる感激の渦の裡に、午前七時二十分、最初の新京發清津直通第五一列車が、日滿兩國旗に飾られつゝホームに辷り込んだ。おめでたう明治四十二年の間島條約後、爾來二十有五年、こゝにいはゆる吉會鐵道の完成となり實にこの交通史上劃期的の一大革命は、日滿の距離を半減するに至つた。

（印畫の複製を禁ず）

日本海の湖水化

日本から滿洲へ一跨ぎ——滿洲國新京と北鮮が、鐵路で結ばれ、日本海も今や湖水化の實を擧げつゝ、既に定期連絡船が敦賀、清津羅津、雄基とを、ガッチリと結びあはせた。日本海横斷、北鮮經由が、新興滿洲國の心臟への最捷路であり、この日滿交通の捷路こそ待望二十有五年の懸案の解決であらねばならぬ。清津、新京間直通の長き日、埠頭に清津市民と歡びを共にする滿洲丸の勇姿を見よ。

（印書の複製を禁ず）

初荷

日滿の捷路として、清津と新京とを結ぶ二十三時間、直通列車は必然に北鮮の海の幸を齎らす。黄海に見ぬ季節の生魚のくさ〴〵が濃厚な味覺をもつてデビューする。平野にすむものにとつては、何といつても大きなよろこびでなければならぬ。寫眞は、直通第一日の新京驛ホームに取卸された初荷である。

（印畫の複製を禁ず）

清　雄間の交通

齋藤總督時代の道路政策から、必然に齎らされた朝鮮に於ける道路網の完成、殊に咸北地方は國境治安上からも、堂々たる自動車快走道路となつた。一方、近海沿岸航路も亦、これに併行し、特に清津・羅津・雄基を結ぶ航路は、設備整ひ、乘心地よき五隻の定期連絡船によつて毎日五往復され、大きな利便を貨客に與へてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

朱乙の秋色

長白山支脈の冠帽峯、雪嶺の東方、此處に源を發する溫井河は、朱乙を洗つて日本海に注ぐ。その溪流の美は、既に古く顯はれ、湯はアルカリ性鹽類泉で、湧出量一日一万四千石に及び、朝鮮別府の稱がある。溫泉は、砂風呂で知られたかれた溫泉と、幽邃なる朱乙溫堡との二個所に湧出し、清津からの一日の行樂に頗る快適、今や北鮮地方を訪れ、また同地方を通過せんとする人の、旅程に必ず織込まるべき名勝として、殷賑を極めてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

朱乙石壘

溫井河の溪流による溫堡聚落の對岸、盆地をなす一端に、長方形に築かれた石壘の一廓を見る。見るかげもなく、內部も畑となつて全く耕されてゐるが、これは當溫泉の舊蹟で今に朱乙溫堡の名ある所以。溫泉旅館の婢は加藤清正の居たところと指さす。この地は、古く女眞民族の據りしところで、一大部落があつたと傳へられてゐるが、定かでない。

（印畫の複製を禁ず）

木の出る山

温泉に倦むだ人は、渓流に沿ふ道を山奥へと杖を曳くことだ。吾心岩のあたり谿は狭まり、水の激するところ岩はなに栗鼠が現はれ山女が釣れる。密林は幽邃を加へ、都會人に秋聲を滿喫させる。道は益々深く、遂に茂山に抜ける。東拓は、現在朱乙の山奥に二千人からの樵夫を入れて木材を伐出してゐる。木材は、道に沿ふ軌道によつて、海に出で、汽船に沖積されてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀附録

北鮮交通略圖

國立法人東洋文庫
110468
昭和十三年九月廿三日

版權所有 不許複製

大連市山縣通一九三

編輯人 青山春路

同

發行人 島崎役治

同

發行所 亞細亞寫眞大觀社

京圖線、國境驛、雄基、羅津、

國際橋と南陽……一
圖們の街相……二
圖們舍宅街……三
開山屯……四
國際橋と上三峯……五
雄基街相……六
雄基港……七
北鮮の漁業……八
羅津港……九
羅津港修築……十

京圖線、國境驛と
雄基羅津

今枝折夫

大連市山縣通一九三

亞細亞寫眞大觀社

電話六二三五
振替大連七一八

第百十二回
十輯五回

京圖線國境驛と雄基・羅津

今枝折夫

一、京圖線

待望久しかつた京圖線五二八粁の全通によつて、こゝに二十五歳の懸案であつた吉會鐵道は、現實に完成を見た。京圖線は、滿洲の心臟新京より始まり吉林・敦化を經、朝陽川でいはゆる南廻線を岐ち、間島の中樞延吉を通つて國境圖們（舊稱灰幕洞）を終端とし、更に圖們江に架する國際鐵橋を介して北鮮鐵道管理局線南陽驛に接續連絡してゐる。既に昭和八年十月十五日以來、新京・清津間直通列車の營業開始となり、事實上日滿を繋ぐ捷經となつて日滿交通史上に一大革新を齎らすに至つたが、將來終端港としての羅津完成の曉は、より一層交通・經濟・軍事上幾多の重要な役割をこの線は持つに至るであらう。

尙、いはゆる南廻線は、現在の天圖鐵道を稱ふ。朝陽川より岐れて間島の要衝龍井を經て開山屯（圖們江岸）に出で、國際鐵橋により北鮮線上三峯に連絡する五十九粁の狹軌は八年末廣軌に改更の上、營業開始を見んとしてゐる。この線全通の曉は新京・清津・京城方面とを繋ぎ、商取引上、國防上に重要性を有するに至るであらう。

二、圖們と南陽

間島を貫流する海蘭河、布爾巴通河、嘎呀河が圖們江に合する三角洲に拓けた平野に立つ圖們は、もと灰幕洞と呼ばれてゐた。

京圖線の建設によつて圖們と改稱、對岸南陽と共に約五十年前は人跡なき蒹葭地であつたが、京圖線の終點に決定して以來、連絡終端港たるべき羅津と共に、俄然躍る圖們時代を現出し、昭和六年末迄漸く數十戸の部落たりしものが、現在に於ては一躍一万三千人を算し、內地人千四百を數へてゐる。拉濱線の開通を見、更に將來圖寧線の完成と共に、圖們及南陽の發展は、安東、新義州を凌ぐ國際重要地點として充分に期待せられてゐる。

三、上三峯と開山屯

上三峯は、元江岬の一農村であつたが、大正九年圖們鐵道の開通によつて奥地間島地方との交通の衝路となり、更に對岸開山屯より龍井、延吉に天圖鐵道の開通を見、昭和二年には國際鐵橋の架設等があつて、益々繁盛を來し、現在は人家約七百戸、人口三千三百餘人を擁する都邑となつた。

開山屯は、天圖線の廣軌改築によつて最近結成された街で、人口二千、內地人約百名は全部工事關係者である。

四、雄基港

雄基港は、北鮮沿岸の最北部圖們江を南に距る六里餘、灣形漏斗の如く、水上面積三百五十万坪、背後に貯水池として三十五万坪の龍水湖を控へ、港は水深陸地から三百間で、十尋乃至十五尋を有する天然の良港である。昭和六年朝鮮總督府は、四箇年繼續事業として、濱地の埋立、艀溜の築設及港內の浚渫を行ひ、更に二期工事として港內引込線の敷設稅關上家等の施設をなしてゐる。

尙朝鮮鐵道局に於ても昭和四年港の右岸に臨港鐵道を敷設し岸壁を設け、鐵道工事材料の陸揚輸送に便し、尙艀船荷揚場等を築造し差當り三千噸級船二隻を同時に繫船し得るやうになつた。蓋し羅津港の補助港として港灣設備完成の曉は、奥地に於ける無限の大物資は、何れも羅津・雄基に吸集して浦鹽を完全にノツクアウトし、尙滿蒙・歐亞連絡の大玄關としての國際都市たらんとしてゐる。

今日この雄基も、日露戰爭當時は、僅かに數十戸の漁村で、併合以來次第に發展し、大正元年朝郵の航路開始と共に、內地人の移住し來るもの頓に增加し、大正十年六月開港場となるや沿岸航路は勿論、各航路の寄港地となり、奥地間島・琿春方面物資の呑吐港として急速に發展した。現在では、京圖線、北鮮線の開通により彪大なる地域を商取引圈內に持ち、市況は活氣に溢れてゐる。

市街は雄基驛を距ること約十數町、人口一六、五〇〇（內地人二、〇〇〇）を算し、街相は新開地としての發展過渡期に在る。

五、羅津港

羅新港は、雄基から西南約十五粁、寬洞嶺を越した地點にある。全鮮第一等を誇る大灣で、灣內の奥行六浬、地形は長崎に似てゐる灣內は水深く、大正七年、西比利亞事件に當つて、我が四十七隻の大艦隊が投錨した事實もあり、灣口は大草島・小草島の二島嶼によつて自然の防波堤をなし、實に無比の天然良港である、從來單なる地方的漁業の本據地となつてゐた羅津が、滿洲事變を契機として一氣に吉會鐵道の完成を見、同時に終端港として決定、こゝに滿鐵が一大港灣施設の計畫を發表して以來、世人の注目は忽ち一攫千金を夢見て來往の視察者日々踵を接し、近々一ヶ年間に萬を超ゆる都市を現出、市況は頗る活氣を呈し、一躍半島の寵兒となつたのである。

羅津港は京圖線の終端港として、昭和十二年度末第一期工事完成後は呑吐能力三百万噸と人口三十万を擁する大都市計畫の下に鋭意工事進捗中で、更に將來は九百万噸の呑吐能力と人口五六十万を目標とする種々の計畫が樹てられ、朝鮮に於ける大連の地位を約束されてゐる。現在滿鐵で港灣計畫中の地は、新安と稱する人家數十軒に過ぎなかつた處で、羅津の名は、灣口にある羅津洞と稱する漁村の名に出たものである。現在は人口一万二三千と稱せられ、バラック建の家屋多く、旅館カフエー等簇出し天井知らずの好況を呈してゐる。

國際橋と南陽

日滿國際鐵橋たる圖們江橋は、延長四二〇米、工費二〇万圓、昭和八年八月起工してより僅かに百餘日を以て竣工した。對岸南陽は近時まで人煙稀な荒蕪地で、住民は殆んど越江耕作してゐたものであるが、今や滿洲國との連絡要衝に當り、ために移住者急激に增加して一躍二千四百名を越ゆる都邑となつた。連絡旅客は、圖們驛に於て日滿稅關の檢査を受けること安東と同樣である。

（印畫の複製を禁ず）

圖們の街相

圖們は僅々過去一年半に驚異的躍進を遂げた新興都市、在住民には未だ堅實なる事業家少く、漫然と景氣に憧憬れて來住した爲、生活狀態にも猶不安定なるものがあるのは當然で、土地の收容と共に都市計畫の發表を見れば、圖們の前途には洋々たるものがあるであらう。京圖線は、遙か街端れの圖們驛から峽谷を縫ひ、圖寧線とは右手の山濤の背後で岐れてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

街宅舍們圖

新興都市圖們に於て、市街の一廓に本建築の堅實さを見せてゐるのは、鐵道建設關係者の舍宅街で、こゝは圖們の原動力である、市中に蔓延る料理屋、飲食店、旅館等の殷賑もこの頗る潑溂たる建設者の原動力に負ふところが決して少くない。然しこの堂々たる建築群も、國家的使命に燃ゆる若者を容れるに一人一米半。旺んなる新興の氣分は市街に溢れてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

開山屯

天圖線廣軌改築全線五十九粁半、工費六百四十五万圓、既に工事の大半を了り、昭和八年末には、假營業開始の運びに至らんとしてこゝに開山屯はいはゆる南廻線の終點驛となり、國際橋を以つて朝鮮上三峯に繋ぶ。既に寫眞中央にモダンな驛舍を誇り、往年加藤清正がオランカイ進入の時から三百餘年、今や間島は邦人發展の中心となつた。感激なきを得ないものがある。

（印畫の複製を禁ず）

國際橋と上三峯

上三峯と開山屯とを繋ぐ國際鐵橋は、延長一千五十五呎、人道、軌道に別れ、日支合辨の出資二百万圓を以つて昭和二年朝鮮總督府鐵道局の架橋。旅客は上三峯驛に於て日滿兩國の稅關檢査を受ける定めになつてゐる。橋の彼方、遙かに展がりを見せ上三峯市街に蟠居する山には、往時女眞族の侵害に備へた三箇の烽燧台の趾があり、地名の濫觴をなしてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

雄基の街相

昭和五年都市計畫を實施、國庫の補助を得て工費二十万圓を以つて雄基川附替を完成、幹線道路の築造、下水溝の工事を施し、區域整然たる感じのよい港街として面目一新した。北鮮線が市街を環狀に迂回して終點雄基驛に至てゐるのも、將來の雄基港完成を見越した都市計畫によるもので、驛前の平地は既に新市街となる街路敷地が設けられて、大雄基の將來を旅客に物語つてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

雄基港

今後十四ヶ年間、羅津港建設工事期間中、隣接地として雄基のもつ經濟上の發展は、羅津港完成後と雖も必然的に期待される加工製造工業の延長地帶として、寧ろより以上のものが觀測されてゐる。從つて雄基市民は現在の港灣設備を以つて滿足せず第三期計畫を樹て目下遠大なる設計のもとに着々都市計畫を實施中である。

（印畫の複製を禁ず）

北鮮の漁業

北鮮海岸に於ける漁業は潮流の關係上暖流魚族及寒流魚族共に回遊生育するので、各種の魚介及海草類に豊み、從つて沿岸各地は漁港としての生命が多分にもつてゐる。各地に於ける定置網の建込み、一方公海漁業に專從する發動汽船があり、鰯の旋回網及流網の發達は、魚肥若くは搾油原料の製産過剰にさへ陷らんとしてゐる。雄基埋立地は、これら鰯の搾粕を製する匂に滿ちてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

羅津港

羅津港は南に海をうけ、東西北の三方は山に圍まれ、灣口は大草島・小草島が天然の防波堤となつて激浪の侵入を防いでゐる。水面積九五〇万坪、水深中央に於て十尋、干滿の差は二尺以下、外海に通ずる二箇の水道の内東側は小船を通ずる程度で、これが爲港内の碇泊を安全ならしめてゐる。沿岸の地形は北より南へ將來の市街豫定地五〇〇万坪が緩傾斜をなし、既に好景氣の餘波が、自然に市街を形成してゐる。

（印畫の複製を禁ず）

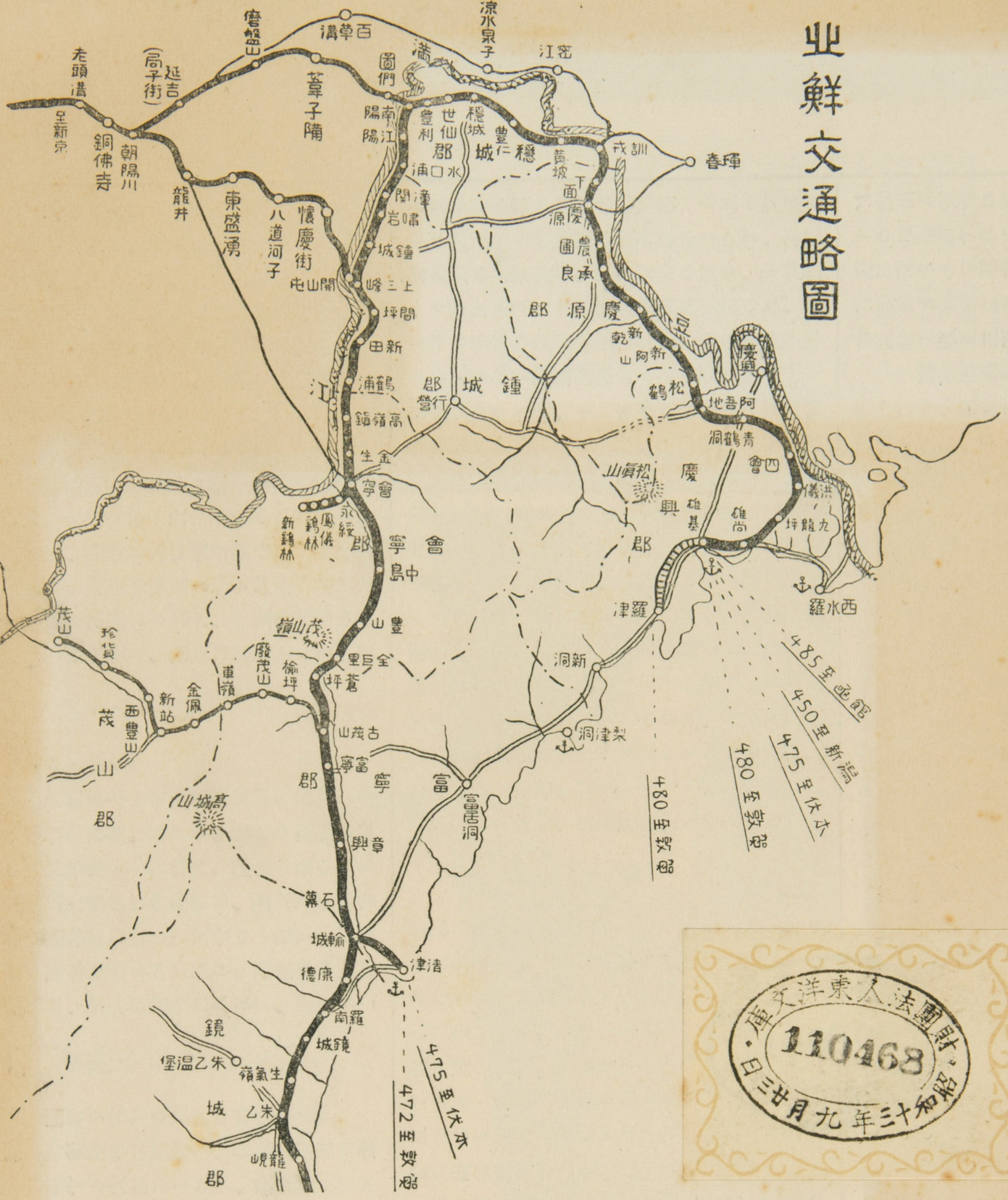
羅津港修築

羅津港第一期工事計畫は、昭和八年起工、五年以内に竣成豫定を以て繫船岸壁延長二五四〇米、繫船能力同時に四千噸級汽船四隻、七千噸級八隻、八千噸級四隻、護岸延長一四九五米、埋立面積六十万六千平方米、海岸浚渫十万六千立方米。雄基から羅津に通ずる雄羅線十五粁は十年七月開通の見込である。この素晴らしい工程は、今日既にいはゆる羅津景氣となつて、この一片の寫眞にもまざ〳〵と活氣を溢れさせてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀附録

亞鮮交通略圖



版權所有　不許複製

大連市山縣通一九三
編輯人　青山春路
同
發行人　島崎役治
同
發行所　亞細亞寫眞大觀社

琿春点描

琿春事件記念碑……一
空から見た琿春……二
市街の特相……三
途上のスナップ……四
露西亞化した建築様式……五
琿春城東門外……六
琿春河の筏……七
朝鮮移民……八
靈寶寺……九
一ちよう風呂……十

琿春淺說　今枝折夫

大連市山縣通一九三
亞細亞寫眞大觀社
電話六二三五
振替大連七一八
第百十三回
十輯六回

琿春淺說

今枝折夫

一、位置

琿春は、遠く渤海の時代からその名を知られた古邑である。琿春河の略中央に位し、延吉の東方約二十四邦里、圖們江を隔てゝ咸鏡北道の慶源及訓戎に對し、北鮮鐵道並に圖們江流によつて雄基地方に連絡する。又琿春より東北に通ずる大道によつて、蘇聯領パシエツト港及び浦鹽港に連接し、日滿蘇三國に最も密接な關係を有する要害の地である。

二、東滿のユートピア

琿春縣は、全人口僅かに八万で、至るところ未墾の耕地が殘されて居り、既墾地の價格も對岸の朝鮮側に比して五分の一以下、又琿春河及密江上流地方の森林は、優に八千五百万石の良材を藏すと言はれ、鑛産に至つては全縣の半分は石炭、殘りの半分は全部産金地で、この天然資源の合理的開發は、擧げて今後にかゝつてゐる。

三、邦人の進出

由來、この地方は、露領に接近せると、奥地の交通頗る不便なるため、共匪の屈強の根據地となり、滿洲事變後も屢々共匪の迫害があつた位で、往年日本朝野を騒がせた琿春襲撃事件は、大正九年の九、十月の兩度行はれ十月には憎みても餘りある最も慘虐な行爲が我が同胞の上に加へられてゐる。

一体、邦人の琿春地方への進出は、明治四十二年の間島協約締結後で、翌年には帝國領事館分館が設置され、邦人百十四人を數へた。その後、邦人增加は襲撃以來停頓の形であつたが、昭和七年末には、邦人三百十八となり尚鮮人四千八百四、滿人九千五百七十二、其他二で、琿春の人口は一万四千六百九十六名を算してゐる。

因に日本側官公衙には、領事館、警察署、内鮮人民會、邦人小學校、公立普通學校等がある。

四、農産

琿春縣の總面積は三百六十二方里、その半分は山林地帶であるから、耕作可能地積は約三十五万町歩、既耕地は七万町歩と推定されてゐる。本縣の主要農産は大豆で、全産額の約六割、十三、四万石と稱されてゐる。その他には粟、小麥、大麥、水稻、玉蜀黍、馬鈴薯等がある。事變以來不作と匪賊の爲收穫の激減を來してゐるが、平年に戻れば全收約四十万石に及ぶ見込である。

五、林産

琿春産出材は、通稱琿春材として取引される「紅松」が第一位で、大正十年には内地方面に四万尺締の仕向けを見、その後は上海、天津方面の需要に應じてゐたが、滿洲國の出現により、關税の關係からも今後は、日本及滿洲内地向に轉ずるものと豫想されてゐる。パルプ原料として最適な「杉松」は、現在では安價なので建築用、殊に板材としての需用がある。從來の仕向地は圖們江岸一帶及雄基清津方面である。「白楊」は沿海州白楊材に匹敵し、燐寸軸木用。仕向地は上海、神戸で就中神戸への移出が多い。右の他に鹽地、檜胡桃、シナノ木、キハダ等の雜木は、家具材としてよりも鐵道枕木としての將來が多い。これら全部の産出總額は、現在に於ては平均一ヶ年五万本、十五万七千尺締であるが、今後奥地の治安維持、運搬設備の完全、木材税率の低下、金融機關の設置等によつて、五倍乃至十倍の出材成績を擧げ得べき見込である尚、これら木材の搬出は、概ね水運によつてゐる。

六、金

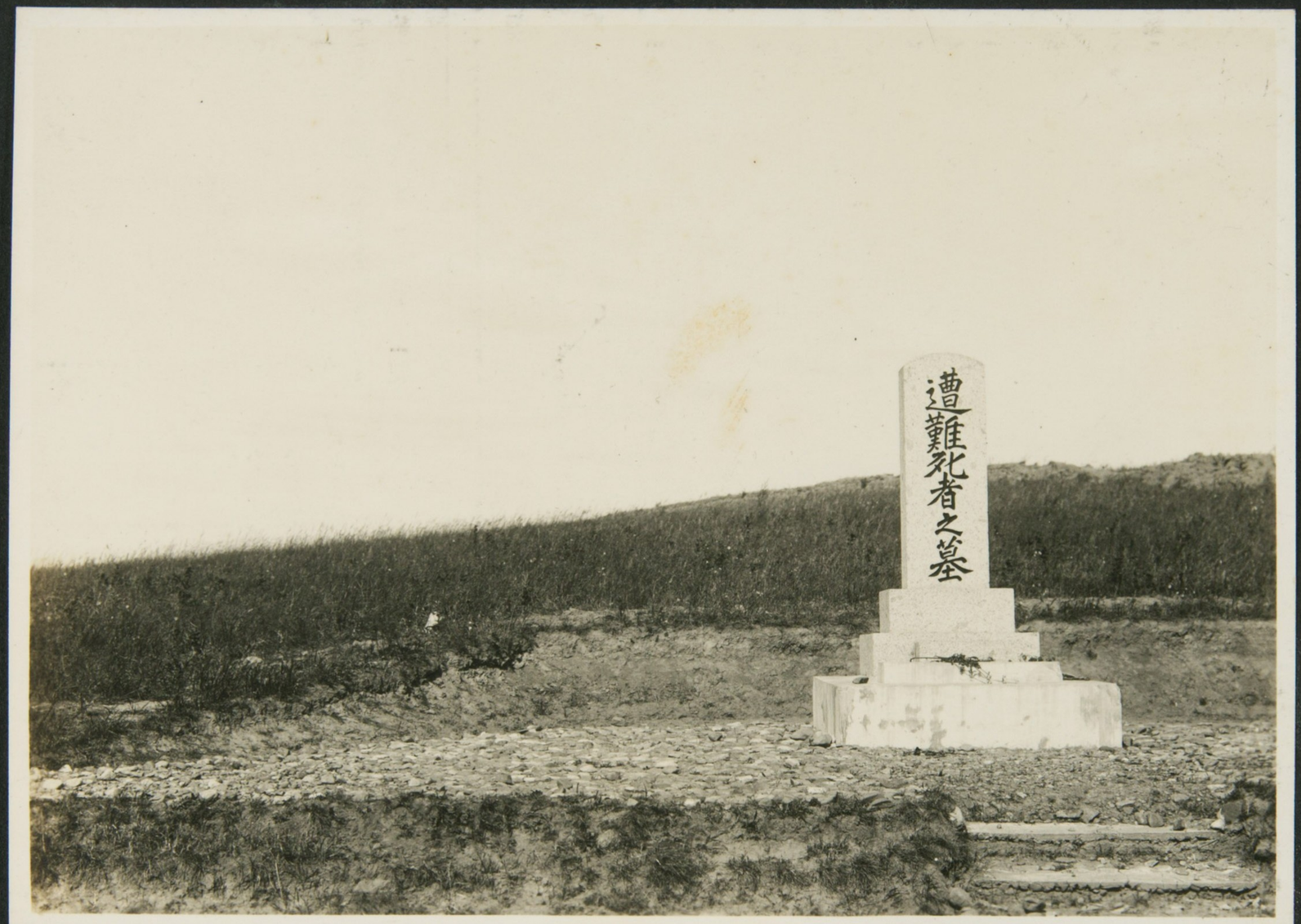
琿春縣の産金は、從來全部琿春市場に集り、地金賣買の取引高から推定すると、年産約三十貫乃至四十貫で、砂金の採集方法が極めて原始的であるから、これに機械力を加ふれば、現在の三、四倍は樂に採れると稱はれてゐる。琿春縣の含金砂金層の延長は、本縣の中央を貫流する琿春河及その支流全部で、優に一百邦里に達してゐる。今、年産額を假に一匁五圓として五百万圓に達することは易々たるもの、これを二十五ヶ年繼續と假定して砂金の埋藏量は一億二千万圓。この他に山金が全然未調査で、これは砂金と同額に見られてゐる。何しろ琿春縣三百六十方里の東半分が、金の埋藏寶庫であるといふから、琿春龍宮説の生れるのも故なしとしない。

七、石炭

石炭は、未だ全く露頭を採掘するにすぎないが、露頭は風化してゐるので、良質とは言へない。品質は、朝鮮會寧の鷄林炭程度である。埋藏量は朝鮮地帶と同樣二億噸と推定され、琿春平野が炭層であると思へば間違ひはない。市價は、家庭までの運搬費を込めて、一噸五圓四十錢位に當るといふ。

八、貿易

琿春は、浦鹽の自由港時代には、パシエツト港を中繼とする貿易が頗る隆盛を極め、その商勢は遠く吉林省城までも達してゐた。然し東淸鐵道（現北滿鐵路）の完成によつて大打撃を受け、その後淸津、雄基兩港の開港に伴つて漸次同地方の貿易系統に變化を來したかくて滿洲國出現以前に於ては、輸出入共毎年二百万乃至三百万圓の間を往來し、合計五百万圓と推定されてゐた。これに國境密輸品鹽、阿片を加算する時は、約一千万圓と見做すのが適當であるとされてゐる。事變後は未だ輸出入統計の據るべきものない。



琿春事件記念碑

大正九年九月十日、東滿馬賊の大頭目譚東海幕下の頭目によつて第一回の城内襲撃が敢行され、越ねて十月二日、之に味を占めた他の頭目等は西門外居留地を襲ひ、放火掠奪殺傷至らざるなくこゝに我は死者内鮮人十八、拉致者十二、焼失家屋新築間もなき領事館を初め日本家屋九棟の犠牲を出すに至つた。かくて邦人進出の尊き人柱は琿春市街の全貌を見守りつゝうら悲しくも風に吹かれてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

空から見た琿春

市街には、琿春河岸に沿ふて東西七町、南北二町半の長方形の土城がある。土城には東西、北に三樓門があり、城内には東西に二條の街路があつて、諸官衙が多い。

市街は、事變後駐屯するわが守備隊によつて治安が維持され、全くの平和鄉となり、東滿邦人開拓の足だまりとなつてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

市街の特相

琿春の街行く人は、誰しも鋪道に敷かれた部厚な板に氣付くであらう。これは露西亞の田園都市に見るものと、全く同一樣式のもので、こゝにも琿春と露西亞とを結ぶ古い由緒が、表はれてゐる。寫眞は西門街に通ずる城外の主要道路で、内鮮人の最も多く居住する繁華な商店街である。

（印畫の複製を禁ず）

途上のスナップ

葫蘆が、あらゆる場合、支那人に愛好され多種多様に利用表現されてゐることは、言ふまでもない。琿琿市街の途上に見る一日商が日本醬油の販賣に巧にこれを取入れて自家のものとなし、看板の様式を支那化して大衆に呼びかけてゐることは、奥地日商の行き方を示したものとして注目すべきではないか。

（印畫の複製を禁ず）

露西亞化した建築樣式

滿洲事變を契機として、今は、徒らに草むして放置されたまゝ訪ふ人もない。琿春の歷史を飾る露西亞文化は、市中至るところの民屋に、そのデザインを殘してゐるが、最も嚴肅なるべき兵營の建築にすら、その片鱗をうかゞふことが出來、如何に當時露西亞が深く琿春を左右してゐたかゞ判るのも面白い。

四民怨嗟の的であつた學良統治下の兵營も

（印畫の複製を禁ず）

琿春城東門外

琿春城は土城で、東、西、北に三門を有してゐる。縣内諸方面に通ずる道路は、今や殆んど完成を見、最近には土門子を經て綏芬河に至る二百餘粁の國道の完成が近づくなど、交通不便な東滿間島一帶の産業國防上にも大福音となるべく、治安恢復の暁はその活用見るべきものがあらう。

（印畫の複製を禁ず）

琿春の河筏

琿春河及密江上流地方の森林は、優に八千五百万石の良材を藏すと稱はれてゐる。これらの産出木材は、概ね鄭蜀の咲く頃から筏に組まれ水運により圖們江に出る。かくて訓戎江岸揚げ鐵道による陸送と、そのまゝ流筏して十里を經、雄基に至るものとの二途に分れてゐる。目下のところ運賃前者の尺締當り金六十錢に對し、後者二十八錢五厘となり、このヒラキの接近が鐵道側に希待されてゐる。

（印書の複製を禁ず）

朝鮮移民

對岸から圖們江を渡つて、琿春地方に朝鮮農民が流入し初めたのは、日露戰爭直後からで、支那政府は當時特別な條件を附して鮮人の土地所有を認めた。その後急速に移住增加を見たのは、大正の末からで、今日では琿春縣全人口の三分の二を鮮人農夫で占め、さながら產土の地にあがるごとき彼等の生活には滿洲に住む日本內地人の學ぶべき点が多い。

（印畫の複製を禁ず）

靈寶寺

琿春に於ける宗教のうち、信徒の最も多きものには、佛教、基督教、回教等がある。基督教信者は朝鮮人間に多く、三教會を有してゐる。佛教は同治年間に傳入したが、光緒年間に寫眞の靈寶禪寺が建立され、土俗は西門外にあるので西大廟と稱んでゐる。伽藍に積まれた高粱がらは、冬の焚もの、田舍びた景觀ではある。

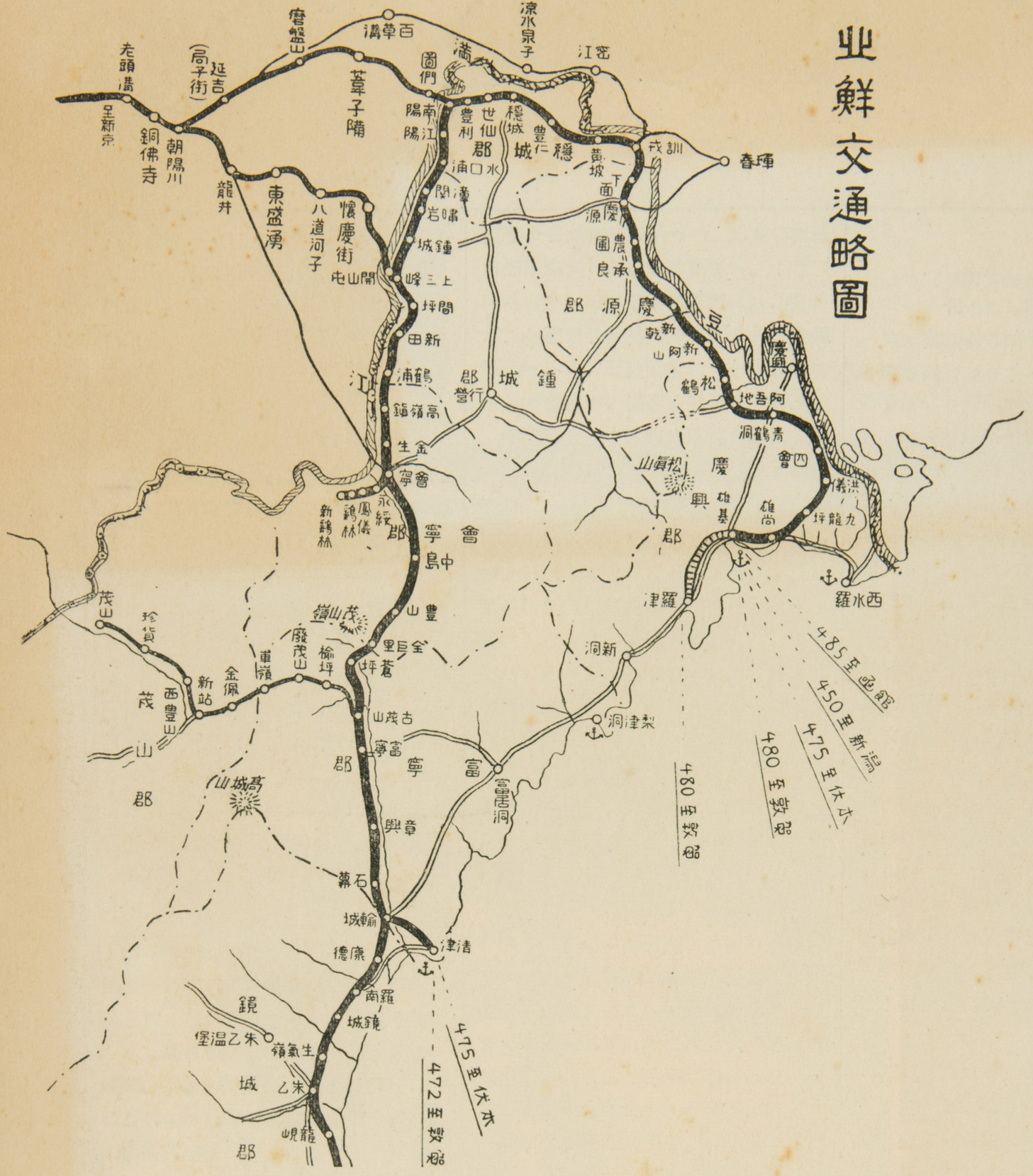
（印畫の複製を禁ず）

一ちよう風呂

琿春名物として聞いてゐる一ちよう風呂はその名が面白いので、旅客の興味を惹いてゐるが、現在では、ありふれた支那風呂で、いはゆる家族風呂を有してゐるに過ぎない。昔歡樂ずきの露西亞人間に利用され、後、刺戟に乏しい此の地の邦人間に嬉しがられて、相當宣傳されたものと想像される。「一ちよう」の名が湯錢一吊から來たものであることは勿論である。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀附録



版權所有　不許復製

大連市山縣通一九三
編輯人　青山春路
同
發行人　島崎役治
同
發行所　亞細亞寫眞大觀社

京圖線点描

滿人の正月……一
凍鯉魚……二
六道河……三
拉法……四
明月溝……五
明月溝殉職弔魂碑……六
朝陽川……七
延吉の展望……八
延吉公園……九
圖們途上……十

京圖線概說

東洋文庫
財團法人東洋文庫
昭和十三年九月廿三日
110468

大連市
西綱正義堂印刷株式會社
電話六二三五
振替大連七一八
第百十四回
十輯七回

京圖線概說

今枝折夫

×

京圖線とは滿洲國の首都新京と、滿鮮の國境圖們とを結ぶ全長五二八粁、滿洲國有鐵道の幹線である。この鐵道の開通は、日支二十年來の大懸案であつた、所謂吉會鐵道問題を事實上に解決したものといふべく、更に裏日本諸海港との連絡によつて日滿交通史上に一新紀元を劃し、わが國多年の念願であつた日本海中心時代を現出し、政治、經濟、交通、軍事等の凡ゆる部門に亘つて、絶大なる意義と價値を有するに至つた。加之、新春より拉濱線の營業開始となり、茲に北滿と結び、本線は一層の重要さを加へてゐる。

×

京圖線の內、新京・吉林間の鐵道は從來吉長鐵道として知られ、明治四十三年（一九一〇年）四月起工、大正元年（一九一二年）十月完成、その後營業成績不良のため、大正六年十月以降滿鐵に委託經營せられて來たものである。

×

次に、吉林・敦化間の吉敦鐵道は、所謂吉會鐵道の一部として大正十四年（一九二五年）に滿鐵と中華民國交通部との間に締結された「吉敦鐵道建設請負契約」に基き、翌大正十五年六月起工、昭和三年十月に完成せられた。

×

吉長・吉敦兩鐵道は、その延長何れも短く、之を個々に經營する時は、多大の經費と不利不便とを有する關係上速かに之を共同經營すべき約束であつたが、當時の中國官憲は種々の口實を設けて之が實現を拒否し、遂に滿洲事變に逢着するに至つた。かくて昭和六年十一月に至つて兩鐵道の合併が實現され、更に大同二年（昭和八年）三月鐵路局が設立されるに及んでその管理下に吉長吉敦鐵路として經營せらるゝに至つた。

×

敦化圖們間の鐵道は、滿洲國の成立後、日滿提携のために急遽建設せられたもので、大同二年四月廿日完成、全年九月滿洲國に引繼がれ、次いで鐵路總局に移營せらるゝと共に本營業を開始し、之と同時に吉長吉敦鐵道に合併せられて、茲に京圖線と呼稱せらるゝに至つた。

×

京圖線はかくの如く、日滿交通の最捷經路として、圖們に於て北鮮鐵道南陽に接續し、一は雄基・羅津に、一は南下して清津に、更に京城に連絡する又朝陽川に於て、最近やうやく建設を了し、來る四月開山屯まで營業開始の豫定である朝開支線を分岐し、これまた北鮮鐵道三上峯に於て連絡、清津・京城方面に至る幹線となるもので、所謂吉會鐵道の舊豫定線が實現する譯である。

×

吉長・吉敦兩鐵道は吉林省の南部を東西に橫貫する鐵道で、沿線は新京から營城子附近までは、所謂滿洲式の平野であるが、土們嶺から東は吉林・敦化の兩盆地を含めて、大略終點圖們まで、車窓に山嶺を友とする山間地帶で、一般に滿洲の山が樹木に乏しく、河水は黃濁してゐるといふ定評に反し、土們嶺以東は日本內地と餘り異らないほど、山に樹木が多く、河水は清澄である。列車は、その間に、老爺嶺・威虎嶺・太平嶺・哈爾巴嶺等の著名な山嶺を越ゆる。老爺嶺は隧道（長さ一八二〇米）に於て、威虎嶺は密林を以つて、太平嶺は本線隨一の高地（標高五八〇米）として顯はれ、その間を高原的風景で綴つてゐる。河川は吉林に松花江を、敦化に牡丹江を緩流させ、哈爾巴嶺を自然の境界として間島にそゝぎ圖們江に入る布爾哈通河は、本線ともつれつゝ谿谷に鐵橋と隧道とを點綴させてゐる。その四季の景勝は滿洲に冠絶してゐると評されてゐる。

×

一方、人文的にこれを見れば、新京から吉林までの沿線及背後地は滿洲の特產物たる大豆雜穀類の產地で、下九台・樺皮廠等の著名な集散地があり、人口密度も多い。吉林から敦化までの山林地帶は、全滿屈指の木材の產地であるが、住民は少い。敦化盆地は相當農產物の產出があり、人口密度も吉林地方に次ぐ。哈爾巴嶺以東老頭溝附近までは、本線で吉林敦化間に次ぐ木材の產地であるが、住民少く、しかもその大部分は鮮人である。老頭溝附近から、延吉の東方國境山峽地帶に至る間の間島盆地は、殆んど餘地を殘さぬまでに耕され、農產物も亦尠くない。殊にこの地方の大豆は、間島大豆と稱し、製油原料として名高い。人口密度も相當多く、大体七割以上鮮人に依て占められてゐる。大体以上によつても判る如く本線の東四分の一は準朝鮮的地帶で、これ亦滿洲內に見られぬ特徵である。

—主として鐵路總局發行案內資料に據る—

滿人の正月

舊正月間近になると、滿人の生活は、日本人のそれと同樣な惶しさだ。街には、買物を整へる人々で一杯となる。爆竹は、彼等になくてならぬもの、すべての惡鬼はこれによつて拂はれる。よき年を迎へるのだ。從つて爆竹に支拂はれる金だけでも、數百金はおろか數千金に及ぶ舊家もあるといふ。ささやかな露天店に爆竹を値切る百姓のたのしさ。

（印畫の複製を禁ず）

凍鯉魚

數尺の厚さある氷板の下に、寒に堪へて棲む鯉魚は、さかんな脂肪の蓄積だ。釣られたり、網でとられた魚は、氷上に投げ出されると一瞬に凍魚と化して、カン〳〵と音を立てる。そして市場に出される魚は、薪のやうに扱はれてゐる。吉林松花江の鯉魚は、冬を遠く支那にまで運ばれ、美味をうたはれてゐるといふ。

（印畫の複製を禁ず）

六道河

京圖線第五十一、五十二の兩列車は、六道河驛で行違ひとなる。事實上の日滿の捷徑として滿洲國新京と朝鮮清津とを結ぶこの列車は、車体それ自身善美をつくした新造車であり、沿線の風光も稀に見る絶勝、沿道の警備も行きとゞいて行客に些の不安も與へない。折柄停車中の六道河は、東に老爺嶺の峻峯を望み、驛は背後に河を負ひ、雜穀、薪炭を積出してゐる。

（印畫の複製を禁ず）

拉法

拉濱線の分岐驛としての拉法は、起工前までは殆んど住民もない寒驛であつたが、最近急速に發展し驛頭には日本婦人の姿すら見受けるに至つた。拉法河流域は鮮人の水田が多い。尙、當驛を去る北五粁の新站は、近く北滿流貨系統に一大變革を招來すべき拉濱線の關門として將來の發展を期待せられてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

明月溝

明月溝は舊名を甕聲磵子と云ひ、敦化・間島街道の中心、要衝をなしてゐる。市街は驛の東、布爾巴通河に沿ひ風光明媚、事變前には戸數四百、鐵道工事開始後急激に發展した。當地は大豆の大集散地であり、又木材の集散地としても知られてゐる。

（印書の複製を禁ず）

明月溝殉職者碑

曾て敦圖線測量開始當時、王德軍の叛軍に襲撃せられて悲壯な最期を遂げた滿鐵派遣員中村・伊東兩君の弔魂碑は、明月溝驛東の山腹に建立せられ、この地を通過する人々をして等しく當時の健闘を追懐默禱を捧げしめてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

朝陽川

天圖輕鐵は、目下廣軌に改築中であるが、本年四月完成の暁は、京圖朝開支線の分岐點として、朝陽川は交通の要衝たるべき地である。附近は地味肥沃、農産物の産出多く、京圖線敷設工事以後、邦人も續々進出し、現在約三百を算してゐる。

（印畫の複製を禁ず）

延吉の展望

延吉は舊名を局子街と云ひ、古くより龍井村に於ける內鮮人の商業的發達に對立して、專ら支那人の政治經濟の中心として發展した。事變前には間島地方に於ける排日の策源地として知られたが、邦人の進出は、敦圖線の起工以來急激な發展を呈し、內地人千二百を算してゐる。附近平野から生産される農産物は六十万石に達する。列車は圖們に至る間山水の美觀を車窓に送迎する。

（印畫の複製を禁ず）

延吉公園

市街は、南に布爾哈通河を控へ、北に緩丘地を擁してゐる。そこに位置する延吉公園は土地柄不相應に整備したもので、爵然たる樹立に圍まれて立つ八角塔は、薄塔と稱ばれ、宣統帝即位の記念に建てられたものと傳へられてゐる。執政溥儀氏が滿洲國第一世皇帝に即位された今日、思ひ併せて感慨深いものがある。

（印書の複製を禁ず）

上途們圖

京圖線の終點圖們は、鐵道開通以來、毎日何軒といふ家がみる〳〵建つて行く。心なき鮮人は雨が降れば泥濘と化す道路の土を、そのまゝ掬つて壁に塗る。にはかに出來た家並に今は交通の邪魔にさへなる井戸。然し新渡來者の群は、絶ゆることなくこの井戸に來ては談笑しつゝ水を運び去る。——圖們途上のスナップである。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀

大黒河点描

初めて望んだ大黒河……一
黒河の景観……二
黒河の街情……三
整然たる街相……四
滿露混血兒……五
ウラゴウエを望む……六
露西亞趣味の門……七
冬籠りの埠頭……八
藍旗溝の守護神……九
原始的な門……十

大黒河の概況・門松　島田好

財團法人東洋文庫
110468
昭和十三年九月廿三日

大連市山縣通一九三

發行所　亞細亞寫眞大觀社

電話六二三五番
振替大連七一八番

（毎月一回發行）

編輯人　青山春路
發行人　島崎役治

第百十五回
十輯八回

大黑河點描

▲大黑河

黑龍江省北邊黑龍江岸、瑷琿上流約四〇粁に位する都會大黑河は前清咸豐八年（一八五八年）の瑷琿條約によつて黑龍江左岸の地を露西亞に割讓すると共に、副統姚福升は露人に蹂躙された地方の開發に努め、江岸一帶の朝鮮人を驅逐し、支那の自國農民を招致して開墾を奬勵し、且つ將來商業地として發展の可能性あるを察し、浦鹽斯德に於ける山東人富豪王治興を招致し特權を與へてその振興に盡さしめた。一方劇場其の他娛樂機關を設け對岸ブラゴウエンチエンスクに於ける自國採金勞働者の消費地とし、尙自領金鑛に對する物資供給地たらしめたので急速な發展を遂げた。斯くして民國元年官制改革に際し道尹を瑷琿に移し、黑河道に於ける行政及び商業上の中心地たらしめ今日に至つたものである。現に人口二萬。

民國元年の大火後、市街地に於ける家屋は制限令を設け建築せしめたため、北滿稀に見る整へる街容を有し商業頗る殷盛で、其の商業範圍は露領ブラゴウエンチエンスクのみならず遠くイルクーツク方面にまで及んでその需給關係を逆轉せしめた。かくて輸出貿易は益々盛況に向ひつゝあつたが、滿洲國の建國と共に滿蘇の交通を禁じたので現在では全く市況疲弊してゐたが、近時我が邦人の進出と共に幾分の活氣を呈し、既に在留邦人約七百名を算してゐる。旅館、料理屋、カフエ等も十數軒あり、最近滿洲國有鐵道が北安から二站を經て敷設されることに決定を見たので、將來の大黑河は商業上からも、國防上からも北滿に於ける主要都市として華やかな將來を待望されてゐる。

×

當市の工業、蜜業、釀造、豆油、製粉、製材、製革等各種に亘つてゐるが、大規模のものはまだないやうである。

×

尙當地方に於ける產物のナンバーワンは、何と言つても砂金で、その年產額は一千萬圓に達し、殊に最近の十年は異常の發展を示し興安、逢源、德源、振興等の公司があり、就中逢源公司は優良なる成績と稱せられてゐるその他の產業は採金事業に壓せられ見るべきものがない。

×

蘇聯住民との間に密輸入の行はれることは他の國境都市同樣有名である。

×

昭和七年滿洲國に反逆した馬占山が脫走して此處に身を寄せ、皇軍に對する反抗を準備し、ブラゴウエンチエンスクを通じて支那政府及び張學良に對して宣傳を行つたことは我等の耳に新しい。

門松

島田好

支那の風俗にして支那に於ては既に廢たれ却て日本に於て保存されてゐるものがある。門松は實にその一例である。尤も門松は支那に於ては今日全然廢れたのではない。地方によつては今でも立てゝゐる。

門松は我國固有の風俗ではなく、支那傳來であることは、學者の間には常識となつてゐるが、一般にはまだ廣く知られてゐない。我國の門松の起源については種々の說があるが文政天保の頃、屋代弘賢が幕命によつて古今の諸說を集錄編纂した「古今要覽稿」の說が最も當を得てゐるやうである。その說の要領は、本朝無題詩といふ詩集の中に惟宗孝言の「長齋之間、以詩代書、呈江才子」といふ詩があるが、この詩の中の「鎖レ門賢木換二貞松一」といふ句の自註に「近來世俗、皆以レ松挿二門戶一、而余以二賢木一換レ之、故云」とある而して孝言は延久承保の頃の人であるから、孝言が近來云々といへば我國の門松は延久承保の頃から始まつたものであらうといふのである。これによれば、我國の門松は八百六十餘年以降のものである。

然るに支那の門松は、魏の董勛の問禮といふ書物に「繫二松枝于門一」といふ句がある又唐の韓鄂の歲華紀麗にも「元日松標二高戶一」といふ句がある。即ち文獻の上では魏代即ち西曆三世紀まで遡られる。實際の起源はもつと古からう。恐らく漢代から始まつたのであらう。果して然らば二千年の歷史を持つてゐる惟ふに、我國の門松は、盛んに支那文明を輸入した平安朝時代に、支那から入つて來たものであらう。

支那各地で清朝の初頃までは盛んに門松を立てたらうことは、我韃靼漂流記の中に「正月の祝、大かた日本に替不申候、門松も立申候」とあるによつて窺知される。韃靼漂流記は、我が漁夫が寬永二十一年圖滿江口附近に漂着し、それより奉天に送られ、更らに北京に移され、滯在一ケ年にして朝鮮を經て送還された途中及び北京滯在中の見聞錄を記したものである。

北平では今日門松を立てないが、滿洲國の奥地——森林地帶では今日尙ほ立てゝゐる。尤も我國の如く竹を添へない。こは竹がないからである。南方楊子江を上下する船や筏の上には松に竹を添へて立てゝゐることが、長尾龍造君の支那民俗誌に見ゐる。

東洋文庫

始めて望んだ大黒河

曠漠たる平原を横斷し白雪皚々たる山岳地帶を縫ひ、人跡未踏の興安嶺を超へ、白樺の林相の物珍らしさに幾度か無聊をやりながらも尙幾日かの難行の旅を續けた。かくて私達の前に遂に展開された大黒河の姿はどんなに憧れの都會であつたか、遙かに望見する丹壁白亞の建築群、先づこの印象をレンズに納めた。

（印畫の複製を禁ず）

大黒河の景觀

江を挟んでブラゴウエシチエンスクと相對し、美しい色彩の建築家屋が整然と双方から望見されて居る形は、他所に見られない情景だ。これが滿蘇國境の現狀である。歴史は、民國元年の大火に遭遇し殆んど金市とまれ、時已に發展の機運に向いを焦土と化したが、市街は面目を一新し、急速つゝあつたので、赤色蘇國との交通杜絶以發達を遂げたが、鐵道の建設を維持してはゐるが、將來の發展の現狀を維持してはゐるが、將來の發展が期待されてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

黒河の街情

黒河の街に入つて先づ目に留まるものは賭博場の看板だ。此の地には、元來多數の賭博場があつて顧客を呼ぶさまは宛然縁日の香具師と同じく、然もその賭博の稅金は頗る高率で市の重要なる財源となつてゐる。滿洲國建國以來我が邦人の進出に伴ひ料理店、旅舘、カフエー等々日增に多く、國境第一線の異色となつてゐる。此の寫眞は南門大街である。

（印畫の複製を禁ず）

整然な街相

物資に乏しい、大黒河の街衢を斯く整然と築き上げたのは、隣國蘇聯の影響もさることだが、當地方に於ける唯一の産物の砂金そのものゝ爲めでもある。年産額實に一千万圓に達する。殊に近年異狀の發達をなし、これにたづさはる諸公司の盛況振は、街頭の高樓櫛比にも現はれてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

滿露混血兒

大黒河の街に、如何に土地柄とは謂へ、滿露の混血兒を多く見うけることは、旅人に奇異の感を抱かせる。彼等は多く母を露西亞人として生れてゐるといふ。露西亞の革命によつて越境した白系露人のいたましい姿がこゝにも見られるのだ。

（印畫の複製を禁ず）

ヴラゴウエを望む

アムールの流れをさしはさんで、滿蘇兩國の觸角をなしてゐるのは、大黒河とヴラゴウエだ。今や鐵條網に張りめぐらされた市街の寺院には、十字架のかはりに赤星章が輝いてゐる。その他建造される數多の兵營、頻りに飛ぶ軍用機など蘇聯の國防戰備が前にして、大黒河は案外に平靜だ。

（印畫の複製を禁ず）

露西亞趣味の門

大黒河公園の門は露西亞趣味だ。細かい彫刻細工を以て隅々まで飾り立て、ペンキを塗つてゐる所、遠い昔のピザンツ藝術が何處となく偲ばれる。いや、門ばかりではなく、公園の構へ、亭の具合など北歐の匂ひが濃厚だ河一つ隔てた向ふ岸の文化が壓倒的に支那文化を消し飛ばしてゐる。只一つ、門にかけた扁額にだけは支那文字が書かれて、黒河道尹の勢力を思ひ出させる。額に丙辰とあるのは民國五年だ、

（印畫の複製を禁ず）

冬籠りの埠頭

交通が不便で物資に惠まれない大黒河にとつては、唯一の物資の供給所は埠頭である～永い冬籠のための日用品も凡て夏期の便船に依つて運ばれる。哈爾賓から十數日を費して溯航して來る輸船に解氷期は人々繊るが如く に賑ふ。寫眞に見る埠頭は黒龍江の結氷と共に訪ふ人影なく唯白雪の中に廣大な白ぬりの寂しい姿を横へて只管春を待つてゐるのだ。

（印畫の複製を禁ず）

藍旗溝の守護神

藍旗溝といふのは大黒河の南方十里位にある小部落だ。板の塀を繞いた門、藁葺のお堂など、どう見ても日本の神社にそつくりの廟がある。日本のものとしか思へぬ。廟の横に丸太を組んだ壁の倉庫がある、古代日本の神社にも同じような倉庫が附属してゐて、それを校倉（アゼクラ）と呼んだものだ。北滿の建築には古代日本を偲ばしめる點が少なからずあるのは注意すべき事だ。

（印畫の複製を禁ず）

原始的な門

門といふ字は戸の字を左右相ひ對せしめて出來た。戸が二枚あれば門だ。この門は破れ戸が二枚、丸太を立て一本の木を橫に渡しただけで、住家も亦可なり粗末な原始的のものだが、それでも窓の飾りや板ガラスを使つたところは、露西亞文化の影響だ。しかし門松を至る所に飾り立てた藁葺き住家は遠く離れた日本の田園との近似を一層思はしめる。

（印書の複製を禁ず）

亞細亞大觀

瑷琿と附近の点描

瑷琿の魁星樓……
天　地　桌……
瑷琿の存在……
瑷琿の舊家……四
正　月　の　飾……五
門　松……六
凍結せる黒龍江……七
古風な住家……八
丸太造りの第一歩……九
桿……十

滿露國境の沿革・瑷琿の概況　島田好

大連市山縣通一九三

發行所　亞細亞寫眞大觀社

電話六二三五番
振替大連七一八番

（毎月一回發行）　編輯人　青山春路
發行人　島崎役治

第百十六回
十輯九回

東洋文庫

財團法人東洋文庫
110468
昭和十三年九月廿三日

滿露國境の沿革

島田好

一、黒龍江の上流シルカの北支なるチヨルナヤ河（一名ウリユーム河）附近のゲルビチ河を以て兩國の境界とす。チヨルナヤ河の上流より分水嶺に至るまでは、山南一帶の黒龍江に流入する河川は盡く清國に屬し、嶺北一帶の河川は盡く露國に屬す。

二、西南はオルクナ河（アルグン河）を以て境界とし、河の南岸は清國に屬す。

露國の北岸は露國に屬す。

即ち今の露領黒龍州及び沿海州は遂にロシヤの版圖に入らなかつた。この條約は滿、漢、蒙、羅甸語を以て記し、石に刻し國境に建てた。これ有名なるネルチンスク條約にして、清國がヨーロツパ諸國と締結した最初の而も最も光輝ある條約である。

ネルチンスク條約

ロシヤのシベリヤ經營は一五五四年イバン四世がウラルの北方に一地を得たるより始まる。それより露人は長驅して東部シベリヤに侵入したのである。即ち一六〇四年にはトムスクに、一六三二年にはヤクーツクに城砦を築き、同年カムチヤツカ半島を略し、一六三六年トムスクのコサツク兵は黒龍江を發見し、尋てヤクーツク總督ゴローヴインは數多の探險隊を派遣してレナ河の上流より黒龍江の左岸に至る地方を踏査せしめ、一六四六年には略ぼ黒龍江左岸一帶の地を掌握することを得た。然るに一六五一年アルバジン（ヤクサ）に要塞を築造したところ、寧古搭の清兵の攻撃するところとなり、遂に露清兩國の衝突を見るに至つた。

其後兩國の紛爭は絶ゆるときなく、清は英邁なる康熙帝の代となつた。帝は黒龍江上に水師を浮べ、沿岸の地に城寨を築きて露人の南侵に備へ、更に一六八三年以來再三コサツク兵を伐ち、アルバジンの要塞を燒却し、其他の城堡も多く破毀した。然し露人も容易に屈するものではない、尋て之を奪回し、城壘を修築したれば、兩國の紛爭は益々劇甚を加へた。

時にロシヤにおいては俊傑なるペテロ大帝新に位に即いたが、尚ほ幼少、且つ内治外交多難の際であつたから、圓滿に紛爭を解決するに決し、ヤクーツク總督ゴローヴインの子フエオドルゴローヴインを全權委員に任命しその旨を訓令した。ゴローヴインは一六八九年使を清廷に遣し、國境上において講和會議を開くべきことを求めた。清帝はネルチンスクを會議場と定め、内大臣索額圖等を全權委員に任命した。索額圖等は宣教師張誠（ゲルビロン）及び徐日昇（ペレイラ）の通譯官を從へ、兵數千を帶同してネルチンスクに到り談判を開始したが、露使は清使の外交手段と示威運動とに飜弄され、ロシヤ側の大讓歩を以て條約を締結した。その國境に關する條項は左の通りである。

愛琿條約

ネルチンスク條約によつて露人は黒龍江流域より逐はれ、約一世紀半に亘る間スタノヴオイ山脈の彼方に遍て清國の弱點が暴露されたから、一八四二年の鴉片戰爭によつて清國の弱點が暴露されたから、露人は再び侵略の歩を進めた。即ちニコラス一世は一八四七年ツーラ總督ムラビエフを東部シベリヤ總督に任命し、專らこの方面の探險に從事せしめた。ムラビエフは翌年任地に赴き、一八四九年親しくカムチヤツカ半島に至り、ペラルパヴロウスクに軍港を築き、尋て樺太に渡り、越ねて一八五〇年黒龍江沿岸一帶の地を露領なりと宣言し、江口にニコライエフスク等を建てた。更に一八五四年七十五隻の船を率ゐて江を下り、沿江に諸市を建設し、一八五六年には沿海州を新設しニコライエフスクを黒龍江總督府の所在地とする旨を公布した。

是より先き清國政府に對し露國政府に向つて強硬なる抗議をなしてゐたが、ムラビエフは既に沿海州の軍事的占領を完成したれば、一八五八年清國全權委員奕山と愛琿城内に會して境界を議定した。這回の會議はネルチンスク條約のときとは全く正反對に、清使はムラビエフのため飜弄され、左の如き條約を締結した。

一、黒龍江を以て兩國の境界となす。

二、ゼーヤ河の附近なる黒龍江の左岸に住する滿洲の住民は舊の如く依然として清領たることを得。

三、烏蘇里江と日本海との間の一帶の地は境界線の確定するまで兩國の共有となす。

烏蘇里江より日本海に至る間の地を共有とするといふが如きは、只一時を糊塗したもので決してロシヤの侵略を阻止するものではない

北京條約

果せるかな、一八六〇年英佛聯合軍北京に入り、清廷大に狼狽し殆ど計の出づる所を知らなかつたとき、露國の使節イグナチーフは清廷のために斡旋しその報酬として清國政府より曩に共有とした地を得た。斯くの如くしてロシヤは日本海の沿岸に廣大なる地域を獲得し、今日の滿露の國境線が定まつたのである。

瑷琿之概況

瑷琿は一に艾虎、又は黒龍江城と稱へ黒龍江の左岸、蘇國領アームル州首府ブラコエシチエンスクと對してゐる。康熙二十三年（紀元二千三百四十四年）黒龍江の東岸なる舊瑷琿に黒龍江將軍を置き、同二十九年之を黒爾根に移し、副統を置いて統轄したが、咸豐八年現在の瑷琿に移駐した。宣統二年（明治四十二年）副總統を廢して瑷琿直隷分縣を設置し、民國元年黒河を合併し黒河に別に分縣を置き、次で同三年に至り廳を廢して治縣とせられたもので、現在の縣は即ちこれである。

これより先露西亞はアルバン城を築くに及んで、頻りに侵略の歩を進めてゐたが、長髪賊の亂に憚み、外は英佛其の他交涉が多く大に苦しめるに乘じ、シベリヤ總督ムラビヨフは清國に迫つて黒龍江將軍奕山と境界條約を締結し黒龍江を境界とした。即ち瑷琿條約である露國の滿洲侵略の端は實にこゝに開かれたのである。その後、日清協約に依つて瑷琿が商埠地として開放され、人口も縣の所在地として六千有餘を有したが、現在は縣が黒河に移つたので其繁榮を奪はれ其の衰勢蔽ふべからざるに至つた。然も近く敷設さるゝ北黒鐵道もこの地を除外してゐるので益々失意の地域に置かれた譯だ。往時黒龍江省に於ける政治的中心地としての繁榮を誇つた名殘が僅かに城壁望樓に史蹟としての往昔を追想せしむるよすがとなるであらう。併し城外江岸に添う南北一哩の市街は露西亞風の煉瓦又は木造家屋櫛比し一種の異國的情調が濃厚である。

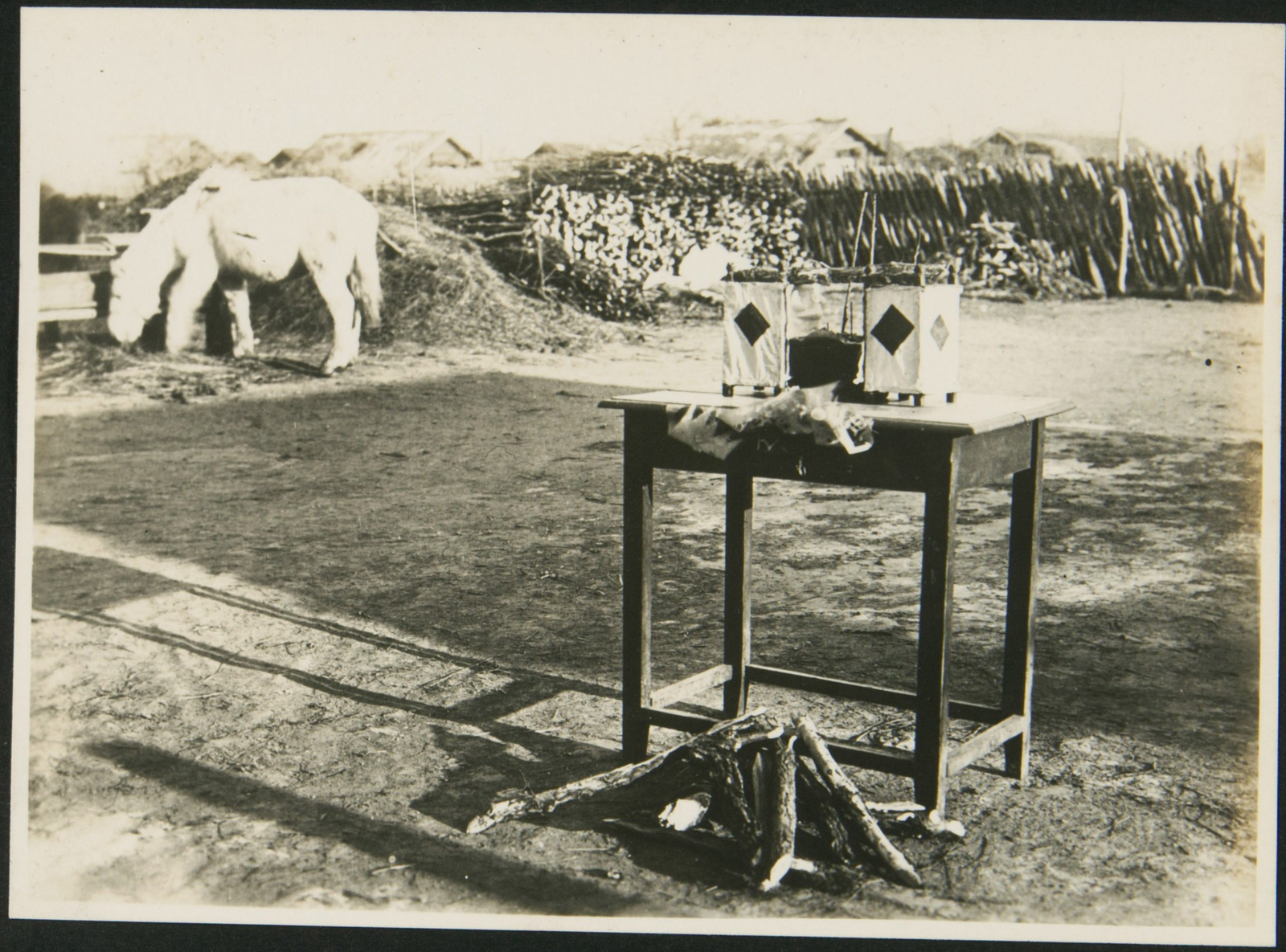
以前は對岸露領農民を顧客として稍々殷賑を呈したが、今や滿洲國建國と同時に全く交通も絶へ孤影寂漠たるもので、概して土地も磽确にして産物も少なく、その一帶は僅かに小麥、燕麥、粟等を主とし農産額は僅少である工業にも亦見るべきものなく内地人の移住者も少なく僅かに國境警備隊の駐在あるのみである。

瓊琿の魁星樓

瓊琿の街はづれに珍らしく露西亞風でない純支那式高樓がある。扁額は失はれてゐるが魁星樓であることは明白だ。魁星樓は支那の城では東南隅に置くのが普通だ。

魁星とは北斗七星のことだ。ところが世俗では魁の文字の組み合せから考へついて、鬼が北斗七星を捧げてゐる彫刻を此の樓の中に祭ることにしてゐる。

（印畫の複製を禁ず）



天地桌

正月最も重要な儀式は、元旦未明に神を迎へることである。先づ庭内に桌子（テーブル）を置き、その上に神像又は神位を安置し、燈を燃し香を焼き、菓食を供へ、一家の主人は家人を従へ桌子の前に至つて三跪九叩の禮を以て神を迎へる。この桌子を天地桌といふ。

（印書の複製を禁ず）

瑷琿の存在

瑷琿といへば誰も想を起す瑷琿條約の瑷琿である。舊縣公署の所在地で城壁、望樓、武廟等もあり縣城としての設備は一通り備つてゐたが、縣公署が大黑河に移つたので、その繁榮を奪はれてこうした部落町となつたのである。將來この町が新交通路から取りはなされたら唯の一寒村として舊い史蹟地としてこの望樓も由緒を傳へる一の存在となるであらう。

（印畫の複製を禁ず）

瑷琿の舊家

瑷琿の舊家兆氏の住宅には珍らしく南方支那の面影を傳へた瓦葺きの門がある。柱の上から長い象の鼻が突き出てゐたり、入口の上に見事な金文字の扁額があつたりして、全く支那を偲ばしめるが、下の方には歐洲風の欄干が用ゐられて、露西亞文化の侵入を思はしめる。

門を入つて主屋を見れば、トタン屋根、軒先きの飾り、ガラス窓など益々露西亞風のハイカラ振りだ。

（印畫の複製を禁ず）

正月の飾

正月には門に門神の像を貼り、また春聯といつて紅い長い紙に吉祥は對句を書いて門框の左右に貼る。いま聯に「不偏不私大同國」とあるのが讀める。こんな田舍でもよく王道帝國にふさはしい句を撰んでゐる。（小供のエプロンに長命富貴と刺繍してゐるにも御注意）

（印畫の複製を禁ず）

門松

滿洲に永年居住してゐても、關東州や滿鐵附屬地外に出ぬ人は、滿洲國人の間に門松を立てる風習のあることを知らずにゐるが、奥地――森林地帶に往けばこの通りである。但しこゝには四本立てゐるが、四本とは限らない、偶數であればよい。詳しきは卷頭記事參照

（印畫の複製を禁ず）

凍結せる黒龍江

江の凍結せる景觀にして、この地方特異の地形が冬季西北風の氣流に對し道を與へ、此の氣流の動く時節は空氣愈々乾燥し、氣壓は昂まり、晴天の時はこれが爲めに熱は發散し氣溫は益々降るといふ。今人跡未踏の北滿の旅の途すがら滿目荒涼たる江畔に立てば零下三十七度の酷寒に身心共に震へ、吐く息も凍り蕭殺泌々として無限の寂寥を覺ゆるのみだ。

（印畫の複製を禁ず）

古風な住家

北安鎭から北へ八十粁、鄭家窩の民家は滿洲の古俗を傳へてゐる點が多い。

左右に高く立つてゐるのは木をくり抜いた煙突だ。古い滿洲語でそれを呼蘭（フーラン）と言ひ女眞（金）民族や滿洲（清）民族が使つたものだ。

窓にはつた紙は高麗紙と言つて朝鮮から渡來したものが喜ばれた。屋根の兩側に低く別の屋根を差しかけてゐるのも北滿方面の特徴だ

（印畫の複製を禁ず）

丸太造りの第一歩

すく〳〵と一直線に伸びた白樺を手頃の長さに切つて、丸太のままで積み重ね隙き間に泥を塗りつければ、それで完全な壁が出來上る。あとは丸太と草とで簡單な屋根を載せるこれが森林地帶で太古から用ゐられてゐる建築の造り方だ。

斯る組み立て方は北滿でも、南露でも古來用ゐられたもので、必しも露西亞人が傳へたのではないが、大規模で複雑な丸太組み建築法は勿論露西亞文化が齎したのだ。

（印畫の複製を禁ず）

桔槹（はねつるべ）

桔槹は「力を用ふること寡くして功を見ること多し」と莊子に見える。こんな經濟原則に適つたものは、いくら苦力賃の安い滿洲でも往々用ゐられてゐる。

滿洲や支那の井には井框がない。日本人で夜、落ちた人がある。旅行者は御用心。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀

北安鎭と其の附近

新興北安鎭站……二
新興の北安鎭……三
末墾の曠野……四
龍鎭縣……五
白樺の林……六
頭站……七
脊梁山地の林相……八
二站……九
興安嶺麓の蛇行流……十
冥衣舖……十一

北安鎭ミ其の附近

大連市山縣通一九三

發行所　亞細亞寫眞大觀社

電話六二三五番
振替大連七一八番

（每月一回發行）

編輯人　青山春路
發行人　島崎役治

東洋文庫

財團法人東洋文庫
110468
昭和十三年九月廿三日

第百十七回
十輯十回

北安鎭と其の附近

北滿の中原と、蘇滿國境を繫ぐ北黑線が、近き日に開通するに至れば、濱北線、齊北線の連絡驛として、又北滿の重要交通路の中心として北安鎭は、全滿洲で一番に新らしい都會となる。從來の樣に露西亞型の影響のない奉天大連を聯想せしめ南滿洲の延長と云ふ感じの深い街相が生れつゝある。人家僅かに三十と云ふ蓬蒼たる荒蕪の地が、滿洲國政府の鐵道政策に依つて既に人口一万に近く、街には電燈が燈り、電話も架設されると云ふ發展振りである。滿洲國民政部は都市計畫を立案中であるから、近く更に完備した市街の建設を見ることであろう。現在の北安鎭は龍鎭縣の所在地で縣政治の中心地となつてゐる。從つて各行政機關中、日本側には各關係官廳滿鐵建設局哈爾賓建設事務所分所等が在り、益々新興の活躍振りを現はしてゐる。

縣の總面積は七十九万二千三百十五晌で、住民の數は僅かに二万足らずと云ふのだから縣内のいたる處は未耕地といふことが出來る産業としては、之といふべきものもなくその爲め、縣の財政は收入不足だから、從つて中央政府の援助に依つて、縣財政が維持されてゐる情態だ。縣の曠大な未耕地は至つて、肥沃であるから、土地は二十年間も肥料は全く不要で、小麥の如きは成る可く痩せた土地を選んで作らないと、丈は延び逐に倒れてしまう程だから、地味については申分がない、と言はれてゐる現に内地人の移民が二三家族小兒を連れ來安し、目下研究中である。水質は目下の處は至つて不良であるが、これも孫家船口方面の良質の水を引いて配給する計畫が出來上つてゐる。鐵道の開通に伴い急速の發達となり日本人も最近六月末の調べでは、人口一千四百三十八と言ふ數字を現してゐる。人生活の安全地帶としての保證も出來たので、學童も漸次多くなり、昭和九年四月には日本人小學校の開設を見るに至つた程である。この他、北安鎭神社、日蓮北安寺、旅館、料理店等十數軒あり、支那人のカフエーも數軒あり、支那人の進出もめざましい。

この地は地理的に見て黑龍江の中心に當るので、將來の北滿交通の大要衝として發展は期して待つべきものがあろう。

五大蓮地山

北安鎭から、三十キロすゝむと二龍山と云ふ部落がある。こゝから更に北進すれば、遙に西北に當つて五大蓮池山の點在して聳へてゐるのを見る。これは今は死火山であるが、附近には溫泉が湧出してゐる。現在は訪ふ人もないが鐵道が完成した曉には北滿の保養地となるであろう。此の附近は至る處濕地で、時期が來ると丹頂鶴が無數に來るそうで人を知らぬ鶴は傍に近奇つても逃けないそうあるとは謂はれてゐる。

龍鎭

茫漠とした、平原にあつて、以前は縣の所在地として政治の中心地であつた一に龍門鎭とも云ふ。民國元年此の地の東北部に當る龍門鎭に縣設治局を設けられたが、該地が地質交通上發展條件を具備しないので同五年此の地に移つて縣治を置かれた。處が事變後北安鎭の發展に伴ひ再び不便を感じられたので遂に北安鎭に移つた。縣城と言ふも城壁を有せず現に人口二千内外で附近村落の供給地たるに過ぎない。最近北黑線が此地に停車場を設けたので、移住民も增加の傾向があり、從て將來の發展の可能地となつた譯だ。日本人は六月末の調査では、人口二四五名となつてゐる

主要産物を擧ぐれば、左の如きものである大豆、粟、小麥、玉蜀黍、葉煙草、薪、木炭等である。

虻蜂等の害虫

茫漠たる高原の處女地、こゝは六月頃から一帶の御花畑になる。鈴蘭、しやくやく、桔梗、あやめなど、百花瞭亂と咲き亂れ、野原一面は、馥郁たる薰風に滿される。此のよい季節が旅人に取つては一番弱らせられる時で、虻蜂其の他の害虫に牛馬は倒される程だ。此の恐ろしい虻等のため旅、人は顏をヴエールで包み手袋をはめ、馬は麻布で包まねばならぬ。倘し其の儘であると虻群に襲はれた場合は血を吸はれたあげくに斃れてしもうのだ。白馬は一日の旅行で眞赤に染まり、極度に衰弱して翌日は動けなくなるのが普通であるといふ、此の虻類の研究に日本から博士達が出向つた程で、遠からず虻類征伐の日が來るであらうと謂はれてゐる。

北安鎮驛

興安北省の曠野に、忽然として生れた、滿洲新都市北安鎮は北緯四十八度、東經百二十八度。北は黑龍江、西は訥河、南は松花江に流れる幾多支流の分水嶺にあつてかつては人家僅かに三十戸に過ぎなかつた。現代交通文化の恩惠を蒙らなかつた荒蕪の地が滿洲帝國の新鐵道政策によつて呼海、齊北兩線中芯點となりて尙將來北黑線の發展と今や急速の開通と相俟ち交通上の重要地點としての將來を侍望されてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

新興の北安鎭

北安鎭は滿洲で最も新らしい活氣に滿ちた街の一つである。賓北線齊北線がこの北安鎭で結び合つたのが昨年の二月、その頃は人口僅かに五十位で、もとより日本人の影もない寂しい僻遠の地で、それが一年有餘の今日、驚嘆すべき變化となつて今や人口に近く邦人一千五百を數へてゐる。日本人小學校が開設され北安神社、滿鐵建設局分所、龍鎭縣公署も新築され電燈電話も架設せられた。黑龍江省の中心に當る當地の將來は北滿交通の大要衝としてまさに刮目すべきものがあらう。

（印畫の複製を禁ず）

末墾の曠野

北安鎮の郊外は肥沃なる曠原が雲際に連つてゐる。こゝに限りなく展開される沃野は二十年間も肥料無して耕作が出來ると云ふ、現に此の地方の百姓は小麥が出來過ぎて穗が重くかゝれて刈入れ前に倒れるといふので、わざ〳〵遠はれてゐる。今やこの電煙漠々の曠野へ鐵道交通の開發に連れて、滿洲國へ移民を送り樂土を築かうとしてゐる。誠に洋々たる將來ではある。

（印畫の複製を禁ず）

龍鎭縣

民國五年龍門鎭の縣設治局を癈して以來公署の所在地となつたが事變當時馬占山のために街は燒かれ、掠奪し盡されて今は見る影もない。事變後北安鎭に縣公署が移つたが北黑線の工事關係上守備隊滿鐵等工事關係の邦人も相當在留し料理店等も榮へてゐる。城内は城壁などに縣城跡の名殘を止めてゐるが、新線の開通に伴ひ發展の可能性は能へられてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

白樺の林

頭站を出でから沿道四邊の丘陵には白樺と楢の林が點々と見られる。林の中にはオロチョン民族が住んでゐる。零下二十度を降る極寒に行儀よく並んだ林相は弱い冬の斜陽に映へて旅人の眼に何んとなく異國的な情調を味はせる。

（印畫の複製を禁ず）

亞細亞大觀（十輯十回の5）

站頭

滿洲國の地圖面には一かど都市のやうに記載されてはゐるが事實今日迄の頭站は人家も無い荒野ヶ原であつた。頭站名稱は縣設站局當時の遺物である。現在では寄克特瑷琿黑河方面の丁場で、時々馬賊移動の足溜りとなつたこともあろ。中繼聯絡の要地ともなつてゐる。この丁場は二站三站と奇克特まで三十支里宛十站となつてゐる。今や北里線が敷設されこの地も停車場を設けられたので肥沃の曠原と移住民を待つて開拓され、將來は農産物林産等の集積地となり其の發展を期待されてゐる。

（印畫の復製を禁ず）

脊梁山地の林相

雲煙漠々積雪皚々たる原始地帯の景觀だ。山を見て馬を駛せしむれば終に斃るとか又知らずして山に登るの俚諺の通り山脈連亘すれども突兀たる高岳峻嶺に乏しく遠望すれば雄大なる連嶂峙立するの觀あるも漸次近接すれば租界は曠原か脊梁山地か何れなるかを思はしむる。遠く黒線を引いて楢白樺の林相は雲漠の間に連亘し其の眺望の雄大さは大陸に於て始めて望見される光景である。

（印畫の複製を禁ず）

二　站

白雪皚々たる盆地の中に浮びあがつた村落だ。鐵道建設のために身命を賭して活躍する滿鐵社員其の他の人々が草分した處。開拓隊の重要なる根據地で新興氣分めざましいものがある。村落の廻りには目先の早い企業家が建てた何々樓何々組用地の標式も新らしい。守備隊滿鐵宿舍も新築されつゝあるが二站神社は既に白樺丸太造りの鳥居を赤い夕陽に染めてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

興安嶺麓の蛇行流

人跡なき未開の地帶を飛行機による。曠大で緩漫な降起を特つ高原の山麓を縫ふ流れは繪畫そのもの丶樣に展開される。こうした自然に蛇行流の形態を採る河は時に簇生する白樺や赤楊の根を洗いつゝウネ〳〵と曲線を畫く。この大陸性河川の特徴は地形學上特に興味を惹き景觀を特色づけてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

冥衣舖

北安鎭

支那一般の家庭では葬式の時、死者に心殘りがないように、家族の人形や家畜、馬車等を紙で作つて燒く習慣がある。この身代りを作るのが冥衣舖だ、冥衣と云ふのは死人に着せる紙衣だから葬式關係たものは大概作る。こゝに掲げつた紙製の牛造車輪等はその代表的の看板だ、(彩興隆記)の家號の通りその片手間には室內裝飾具を造りてゐる。

(印畵の複製を禁ず)

財團法人東洋文庫
昭和十三年九月廿三日
110468

亞細亞大觀附錄

踏破撮影略圖

第百十七回
拾輯十一回

承德こいふ處（熱河省）

三室山人

瘤爺さん……一
錘峰落照……二
東山の遠望……三
熱河の水運……四
渡渉難……五
殊像寺……六
殊像寺の側景……七
四天王の像……八
羅漢堂山門……九
沈默の行者……十

大連市山縣通一九三
亞細亞寫眞大觀社
電話六二三五
振替大連七一八

發行　毎月一回發行

東洋文庫

版權所有　不許複製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山春路
發行人　同　島崎役治
發行所　同　亞細亞寫眞大觀社

承德といふ處

三室山人

承德は丘陵が多く平地の極めて少ない所だ。眞の平地と言つてもよいのは、すべて河が造つてくれた狹長な場所で、而も雨期になると氾濫して始末に困る。

避暑山莊（離宮）の池畔に熱河と刻んだ石碑が立つてゐて、そこからは一年中水がわいて出る。ボロボロボロと水泡が音をたて乍ら、あちらでも此方でも水中に出て來る。特に多く出て來る場所には、近頃水管を立ててそれから桶にたまるやうにしてある。熱河省へ入ると瘤が出來てはやりきれないから生水は一滴も飲まなかつたが、此處へ來ると思はず水管に口をあてて飲んだものだ。その邊で草を刈つてゐる苦力達も屢々やつて來て喉をうるほしてゐる。彼等の喉首には瘤が見えない。先づバセドー氏病になる心配はないと、私も安心した。これは夏期に於ける經驗であるが、冬、池に一面に氷がはりつめて上を兵隊さんが歩いてゐた頃でも、この自然の泉の附近には氷がなかつた。熱河とあるから水が溫いのかと思つて手をつけて見たが、矢張り冷たかつた。只氷點下にならないだけの溫度なのだらう。

此の熱河とある泉から出る水が、離宮の大きな池に水を供給し、更らに近くを流れてゐる河にも注いだ時があるのだらう。近くの河こそ所謂熱河なので、この河名が承德の地名となり、次第にひろがつて特別地區とか省全體の地名にまで適用されるに至つた。この河は冬になると全く氷に覆はれて、凡そ熱河といふ名稱に似てもつかないものに變る。そして前記の通り、雨期になると濁水が氾濫する怖があるので、避暑山莊の東側から市街の南側にかけて一面に堤防が築かれ、市街の低地は堤防よりも少し低いから、增水した時の危險は想像に難くない。

河には嘗て高粱殼で造つた程度の橋がかけられそれによつて東方の村落と連絡がとれ、東の丘陵地にある寺々を參詣することが出來たが、今夏の增水によつて其の橋も流失し、水量が多い上に流も急だから、東方の村々とは交通が杜絕し、お寺見物も不可能になつた、しかし他面。承德市街の警備といふ點では、却つて安全になつたと言へるかも知れない。冬になれば、氷がはりつめるので勿論連絡が復活する。

承德の最もよい土地は避暑山莊が占領してゐてその殘りの僅かばかりの平地と丘陵とに市街が出來てゐるので、街路は狹いばかりか曲りくねり、民家は高い丘の上から低い所へかけてギッシリ建てつまり、家を建てやうにも全く土地がない。そこへ王道主義の省政府が置かれ急激に住民が增加するので、家は益々拂底するばかりである。避暑山莊は歷史的紀念地で永久に保存すべき場所であるから、これを解放して住宅地とすることは不可であるが、假りに住宅地にして了ふにしても、その廣さたるや知れて居り、到底大都市建設の要求には適應しない。從つて承德の將來を考へると、此處が非常な大都市となることは出來ない運命にあり、軍隊の駐屯地としても如何かと思はれる。

それで承德將來の計畫としては、承德を單に政治的中心都市、及び離宮や多くの喇嘛寺などの名勝舊跡遊覽都市とすべきであり、軍隊駐屯地や製造工場地などは他の方に求むべきであらうと思ふ承德の南方には飛行場があるが、ここは元來河原であり、恐らく近い將來に住宅街に變つて了ふだらう。それで飛行場も亦少し遠い別の土地に移轉しなければならぬのではないかと思ふ。私は右のやうに承德の膨張といふ點で可なり悲觀的な見方をしてゐるが、それとても餘りに承德が急速な發達をしつつある結果に基くので、思はずも取越し苦勞をするのである。

遊覽地としての承德はまことによい所だ。恐らく滿洲第一と言つてよからう。嘗ては水の都の吉林などが賞讃されてゐたが、吉林など足下にも寄れないと思ふ。もとよりそれは東洋趣味といふ立場からの見方で、ハルビンとか大連の施設や趣味と比較するのは禁物である。

汽車が承德まで通ずるのも近いことであるから私は閑暇を持たれた人は是非一度は遊覽せられよと言ひたい。山莊の庭園美は勿論のことだが、支那風、西藏風の喇嘛寺がこれほど密集してゐる所は他に比がなく、何人をも十分滿足せしめるに相違ないからである。

瘤爺さん

（熱河承德）

熱河省灤河流域のバセド氏病は以前から衆人に知られた奇病と言はれてゐた。石灰分の多い生水を飲むためだとも想像された。所が日本の醫學者達の研究ではカルシウム分の缺乏によるのだから「昆布で瘤とれ」などと叫ばれるに至つた。しかし熱河省へ入つて見ると我々の眼につくやうな瘤のある人は案外少い。捜がすのに苦勞する位だ。この寫眞ほどの大きな瘤はむしろ珍らしいと言つてよい。

（印畫の複製を禁ず）

（1 の回一十輯十）觀大亞細亞

錘峯落照

（熱河承德）

承德の避暑山莊（離宮）や獅子溝の寺々をめぐるにつけても、いつも遙か遠くの東方の山に浮ぶ奇岩の姿が目につく。それが俗稱棒垂山、文獻に磬錘峯とある岩だ。

康熙帝が熱河三十六景を選定した時にも、錘峯落照と題して此の奇岩を一景に加へ、詩を賦し繪を描かしめた。まことに此の磬錘峯は今に至るまで承德の風光を物語る一つのシムボルと言つてよい。

（印畫の複製を禁ず）

東山遠望

（熱河　承德）

承德市街の東を流れ、やがて西へ、南へと屈曲してゐるのは熱河である。熱河といふ地名は此の河から起つた。

熱河を隔てて東方に横はる丘陵には、圓錐形屋根が聳ゆた普樂寺（圓亭子）、三層樓が孤影蕭然としてゐる安遠廟（伊犁廟）を始めまだ二三の寺が點在して正に一幅の畫境を呈してゐる。

（印畫の複製を禁ず）

熱河の水運

（熱河承德）

寫眞は承德市街の南方、熱河の水が著しく增してゐる時の有樣でこの水はやがて灤河に注ぐ。これ等の河は古來承德市街の必需品を運輸する最も重要な通路だつた。

寫眞の右上に見える木橋を渡つて左方に入れば、そこに承德の市街が開けて來る。比較的近くに見える丘陵が避暑山莊（離宮）のある所、丘陵の彼方に多くの喇嘛寺が建てつらなつてゐるのだ。

（印畫の複製を禁ず）

渡渉難

（熱河承徳附近）

熱河地方の交通路は大半河床を利用してゐるので、雨があれば忽ちに交通杜絶だ。承徳の町は屢々離れ小島のやうに、外界との交渉が一切斷たれる事がある。

唯一つとも賴むのはトラックだ。そのトラックさへも渡船に乘せられて辛じて連絡されてゐる。北滿では斯る渡船が非常に發達してゐるが、熱河省では未だ幼稚なので、一つの河を渡るのが並々ならぬ苦勞である。

（印畫の複製を禁ず）

殊像寺

（熱河 承德）

殊像寺は獅子溝の比較的奥の方、普陀宗乗之廟の西、羅漢堂の東にある。

乾隆二十六年、帝は母后を奉じて山西省五臺山の山麓、文珠菩薩示現の聖地と傳へられる殊像寺に參詣した。それから啓示を得てこに堂殿樓閣の制を五臺山に倣ひ、寺名も亦殊像寺として建られたのがこの寺だ。乾隆三十九年（西紀一七七四）起工、翌年完成した。

（印畫の複製を禁ず）

殊像寺側景

（熱河　承德）

殊像寺は山門、東西に鐘・鼓樓、次に天王殿、その北に東西配殿、大殿があり、それより上は石を積み重ねて山嶽の狀を示し、上に東西配殿と八角佛殿とが建てゝある。八角殿を寶相閣と言ひ、中に獅子にのつた佛像があるが、それは乾隆帝の御顏に似せて作られたといふ俗傳があり、さう思へば多少似た所もあるやうな氣がする。寫眞でもわかる通り此の寺も亦甚しく壞れてゐる。

（印畫の複製を禁ず）

四天王の像

（熱河承德の殊像寺）

この寺でも必ず山門の奥に天王殿を設けて中に四天王の坐像を置く。丁度日本の寺に仁王様の彫刻があるのと同じである。悪魔襲來を防ぐための護衛と思へばよからう。

四天王の服装は支那の鎧と少し異なり、西域胡人の武装から出發して居り、獸面を至る所にとりつけたのは一種の避邪のためだ。寫眞は殊寺像の天王像、貝殻や田螺をふみつけた喇嘛趣味でない所に注意を要する。

（印畫の複製を禁ず）

羅漢堂山門

（熱河　承德）

羅漢堂は獅子溝の谷間の最も奥にある小さな寺だ。乾隆三十九年（西紀一七七四）の建立で、諸堂の額はすべて乾隆帝の御筆だつたといふが、今は諸堂みな頽破して、その片影さへない。寺の配置は山門、東西掖門、門を入れば東に鐘樓、西は鼓樓、正面に天王殿、更に北へ進めば東西配殿、最も奥に大殿があり、大殿には五百羅漢の像がある。建築としても珍らしい構へである。

（印畫の複製を禁ず）

沈默の行者

（熱河承德の羅漢堂）

羅漢堂の大殿の中には通路が田の字形に走り、通路の兩側に無數の羅漢像がならんでゐる。その像の前には一々第何十××尊者といふやうな位牌があり、なるほど五百ほどあるに相違ないと何人にもうなづかせる。通路の辻々には別の佛○があり、特に殿の中央の佛像前では神籤が引けるやうにしてある。大殿は大破してゐたが今年五月一時的の修補が施されて雨が漏らない程度になつた。

（印畫の複製を禁ず）

佛國法人東洋文庫
昭和十三年九月廿三日
110468

亞細亞大觀附錄

熱河破撮影略圖

版權所有　不許複製
編輯人　大連市山縣通一九三　青山春路
發行人　同　島崎役治
發行所　同　亞細亞寫眞大觀社

承德の普寧寺

村田治郎

大佛寺展望……一
蕭々たる碑閣……二
獅々に乘る佛……三
喇嘛塔を頂く正殿……四
磴道と門……五
大乘之閣……六
双龍の彫刻……七
特色を示す屋根……八
林間の廢墟……九
普佑寺……十

第百十九回
拾輯十二回

東洋文庫

大連市山縣通一九三
亞細亞寫眞大觀社
電話六二三五
振替大連七一八
發行　每月一回發行

承德の普寧寺

村田治郎

欽定熱河志（卷七十九）によれば「普寧寺は熱河行宮の東北五里、獅子溝にある。乾隆二十年に準噶爾（ズンガル）を平定して、皇帝は避暑山莊（卽ち熱河行宮）に行幸せられてゐると、四衛拉特（オイラト）部落が來觀したので宴を賜ふた。そして普寧寺を勅建して以て軍事の成功を昭かにする事とし、西藏の三摩耶廟の制を摸仿した」とある。

これよりも更らに詳しいのは今碑閣の中央に立つてゐる御製普寧寺碑文である。それには乾隆二十年の夏五月、準噶爾を平定し冬十月には四衛拉特の部落、舊附新歸の衆を避暑山莊で大いに宴賚した。卽ち綽羅斯（チョロス）、都爾伯特（デルベート）、輝特（ホイト）、和碩特（ホシヨート）の四族の台吉を各々封じて汗、王などとした。……昔我が皇祖（卽ち聖宗康熙帝）が喀爾喀（カルカ）を平定するや彙宗寺を多倫諾爾（ドロンノール）に建てて衆志を一にした先例にしたがひ、普寧寺を山莊の北麓に建てることにした。……蒙古では以前から黃教を信仰してゐるから寺の式を西藏の三摩耶廟の式によつて造り、普寧寺と名づける。といふのは是より雪山、葱嶺を經て西海、恒河沙に及ぶ地域の庶民が其の居を安んじ其の業を樂しみ永々普寧ならんことを願うからである云々と讀める。

以上で此の寺が建てられるに至つた大略のすじだけは判つたが、尙ほ多少の註釋を加へて置かう。

ズンガル部族といふのは衛拉特（オイラト）族の一部に屬する。衛拉特は額魯特（エルート）とも書き、明代には瓦剌と書いた。キルギス族は彼等をカルマクと呼んだので、それが今日でも採用されて西洋人はカルマク族としてゐる。清朝初期には此のオイラト族が四部に分れ、

1、準噶爾（ズンガル）……伊犁河谷を中心として游牧
2、都爾伯特（デルベート）……イルチシ河上流を游牧
3、土爾扈特（トルゴト）……雅爾（ヤル）、卽ち今の塔爾巴哈（タルバカ）地方を游牧
4、和碩特（ホシヨート）……烏魯木齊（ウルムチ）地方を游牧（オイラト）

右のやうになつて居て、是を四衛拉特と呼んだ。所が十六世紀の初頃にズンガル部の巴圖爾（バツル）、渾台吉（ホンタイヂ）が勢力を張り他部を壓迫したので、トルゴト部の和鄂爾勒克（ホルルク）は二十餘萬の部衆を率ゐて、キルギス曠原より露領ヴォルガ河畔に走つた。同じ頃にホシヨート部も大半は青海地方に逃げ去つた。そこで乾隆帝がズンガルを平定するや、ズンガル部の代りに綽羅斯（チョロス）部を立てトルゴトの代りに都爾伯特（デルベート）の屬部たる輝特（ホイト）部（同じくヤル地方に遊牧）も浮び上らしめ、以前からあつた都爾伯特と和碩特（ホシヨート）とを加へ、新たな四衛拉特（オイラト）が出來た。碑文に出て來たのは此の新しい四部がオイラトである。

衛拉特族の中ではズンガルが特に强力だつた。清朝が討伐の目標としたのもズンガルだ。ズンガル部が清朝と戰ふ（カルカ）に至つたのは康熙帝の時からであるが、康熙帝の時は喀爾喀蒙古を助ける主眼で、ズンガルを服從させようとはしなかつた。次の雍正帝の時にはズンガルを討伐しに行つて大敗した事さへある。何にしてもズンガルは清朝にとつて代々の癌だつた。乾隆帝の時になると、今迄ズンガル部には傑出した統率者が續いてゐたのに、それが絶えて十分な指導者が居ない上に內訌が起つた。この機會に乘じて乾隆二十年二月に出兵し、五月五日には伊犁の西北百八十支里なる格登山（コドン）にあつたズンガル部首、達瓦齊（ダワチ）の帳幕を陷し入れた。並に始めてズンガル部が清朝に屈從したのであるから、乾隆帝の喜びの程も推察せられる。

故に本寺は全くズンガルの平定、戰勝紀念のために建てられたのであるが、同時にオイラト族が他の民族に比して非常に熱心な喇嘛教信者であつた點を考へるならば、本寺の建設が其處を覗ひ、喇嘛教を利用してズンガル部その他のオイラト族を懷柔しようとする政策が含められてゐたことは言ふまでもなからう。

從つて本寺は全く黃喇嘛教に屬するが、寺內には所謂西藏式といはうか又は喇嘛教的とでも言ふべき特殊なグロテスクな佛像その他裝飾調度類は極めて少なく、山門附近から大雄寶殿に至るまで、殆んど普通の佛寺の面影を示してゐる。七丈二尺もある大佛とても喇嘛教的な點は少ない。建築も亦支那系の表現で、只奥の方に喇嘛塔と西藏風の小建築が點在してゐる位が喇嘛寺らしい點である。

只一つ最も異色のあるのは大乘之閣の屋頂であつて、中央に高大な屋根、四隅に一段低い屋根を置いてゐる表現は、北平の五塔寺、西黃寺班禪（パンチエン）喇嘛塔のやうな西藏系統の意義を支那系の屋根で以て現はしたものであり、更らに遠く印度のブダガヤに於ける所謂大塔と相通ずるものと言つてよい。

それから今はもう消え失せた事であるが嘗て此の寺では薩滿教（滿洲民族固有の原始宗教）（サマン）の祭儀が行はれ、而も斯る祭儀は承德にある無數の寺の中で唯本寺だけで行はれたといふ。

大佛寺展望

（熱河承德）

大佛寺といふのは大佛があるから起つた通俗の名稱で、正しくは普寧寺と呼ぶ。避暑山莊即ち離宮の東側の道を北に進んで獅子溝へ行けば、右手に高く聳えてゐるのが此の寺だ。

寫眞の右端に見える大きな屋根は、東隣の普佑寺。その左の屋根が普寧寺の大雄寶殿、最も高く聳えた高樓が大乘之閣。その間には多くの小建築が點々と介在してゐる。

（印畫の複製を禁ず）

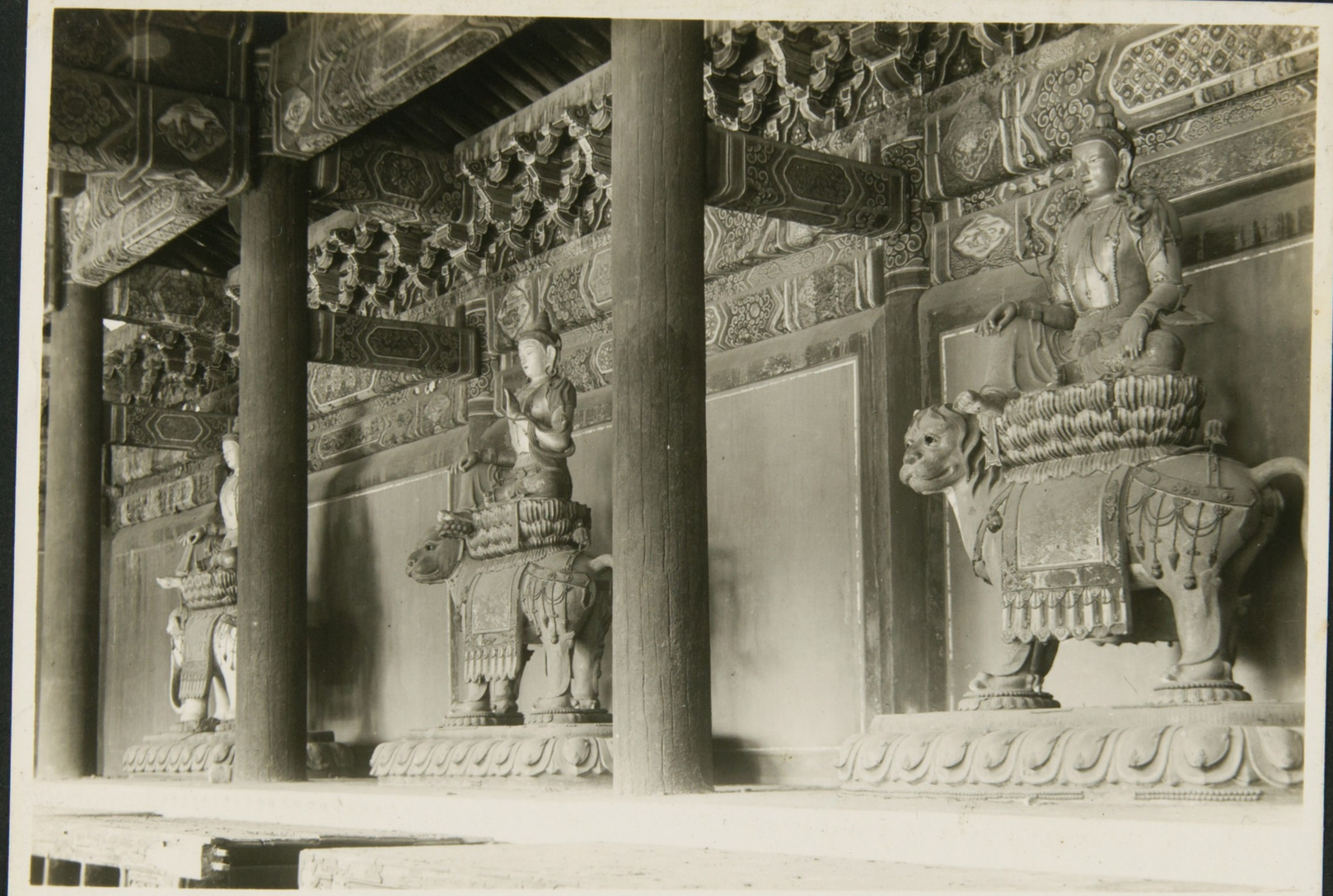
肅々たる碑閣

（熱河承德）

普寧寺の山門を入れば中央に頽敗した碑閣がある。中に三つの大石碑が立ち、中央の碑には御製普寧寺碑文　西側の碑に平定準噶爾後勒銘伊犁之碑、東側の碑に平定準噶爾勒銘伊犁之碑とある、それぞれ長い文章が漢字滿洲字、蒙古字、西藏字で書かれてゐる。

それによれば此の寺は乾隆二十年（西紀一七五五）ズンガル民族を平定した紀念として建てられたものである。

（印畫の複製を禁ず）



獅子に乘る佛

（熱河　承德）

普寧寺の碑閣の奥には天王殿、更に進んで左右の掖門を入ると、そこには東廡、西廡があり、中央に大雄寶殿の威容が浮ぶ。東、西廡には寫眞のやうな佛像が各三體祀つてある。これは日本の佛寺に於ける密教系の佛像と一脈相ひ通じてゐる感が深いが、實際喇嘛教そのものは佛教の中の密教と根源を同じくすると見てよい。

（印畫の複製を禁ず）

喇嘛塔を頂く正殿

（熱河承徳）

普寧寺の正殿、即ち大雄寶殿は屋頂に小さな喇嘛塔をのせてゐる。正面七楹（桁間が七あること）正面の幅が三十二米、奥行十六米半に及ぶ大きな建築だ。

内には中央の後方に三體の佛像、左右の側壁に沿うて各九體の羅漢像（合計十八羅漢）があり、また讀經用の座席と長机とが左右に並んでゐる。

（印畫の複製を禁ず）

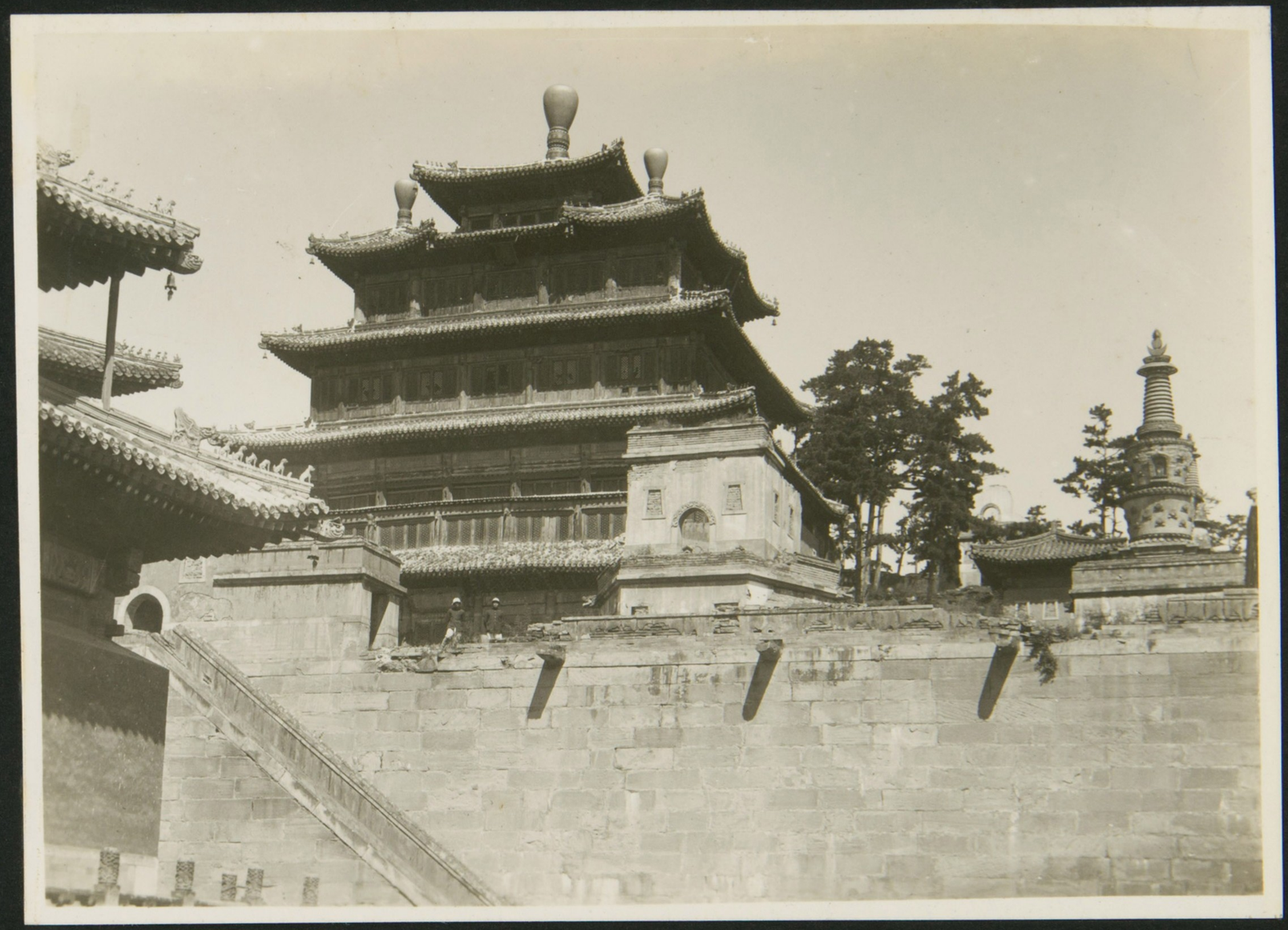
磴道と門

（熱河　承德）

普寧寺、大雄寶殿の背後は石を疊んで急に高臺となる。門が見上げるばかり高く聳えて居て、その左右には石段がどこ迄も續く。門の上層は梯形の平面になつて居り、從つて屋根も亦前方が狹く後方の廣い梯形平面をなしてゐるのは、他に類の少ない珍らしい手法である。寫眞の左方に出てゐる屋根は大雄寶殿だ。

（印書の複製を禁ず）

（5の回　十輯十）觀大亞細亞



大乘之閣

（熱河承德）

普寧寺の最も重要な建築は大乘之閣だ。中に七丈餘の大きな木彫の佛像が立ち、三階まで上れば漸く御顔を拜むことが出來る程の巨大さだ。

正面から見れば頂上まで五層になつてゐるが、傾斜面を利用して建てたので、背面から言へば四層なのである。寫眞の左に少し姿を出してゐるのは、梯形をなしてゐる門の一部だ。

（印畫の複製を禁ず）

双龍の彫刻

（熟河承德）

普寧寺大乘之閣の月臺（石壇）正面の中央には此の双龍の彫刻が石段の中央に挿入してある。同じような彫刻は大雄寶殿の月臺にもあるが、獨り此の寺のみでなく多くの寺にもあつて珍らしいとは言へないが、しかし支那建築の一つの象徴として注視してもよからう。石質が極めて脆いので彫刻の下部ばかりでなく、石段、月臺の側面など可なり破損の甚しいのが眼につくのは惜しい。

（印畫の複製を禁ず）

特色を示す屋根

（熱河　承德）

大乘之閣の外觀の中で、最も特異なのは屋根だ。中央が特に高く、その四隅に夫々同じ形の小さな屋根を配して、大小同形の屋根が五個ならび、頂に同形の寶珠をのせてゐる有樣は、他に類例の稀な手法だ。建築の細部は明かに支那系統だが、建築の意義精神が西藏傳來の喇嘛教的だつた事を示すのだらう。木の間に薄く浮んでゐるのは承德東山の奇岩・磬錘峰だ。

（印畫の複製を禁ず）

林間の廢墟

（熟河承德）

普寧寺の大乘之閣の左右から後方にかけては多くの喇嘛塔と西藏的外形を持つ小建築が散在し、それも大半は既に廢墟と言つてよい程に壞れてゐる。

しかし自然岩を積んで一種の庭苑とし、その間廢殘の小建築が點在してゐるのは、別種の趣がある。喇嘛塔が必しも同形でなく、夫々特異な形態を持つてゐるのは、風光に變化を與へて却つて面白い。

（印書の複製を禁ず）

普佑寺

（熱河承德）

普佑寺は普寧（大佛）寺の東隣にあり、從つて多くの人は大佛寺の一部と誤解しがちのやうだ。この寺も亦非常に大破し、既に門、天王殿など見る影もない。

寫眞に見えるのは正殿たる大方廣殿、美しい綠の瓦を葺いてゐるのが一際人眼をひく。しかし殿内は全く空虚だ。この寺は乾隆二十五年（西紀一七六〇）の勅建である。

（印畫の複製を禁ず）